

アガハナ



0. 11

6年11月
目学会

穂積俊文：日本産カミキリ大図鑑（1984）の分布の追加と訂正	1
水野弘造：京都府産ナガクチキムシ科甲虫目録	20
水野弘造：兵庫県産ナガクチキムシ科甲虫目録	29
斎藤秀生・斎藤明子： <i>Pidonia</i> の地域変異 II 対馬 (大陸と日本との陸橋の島に棲む <i>Pidonia</i> の類)	37
第9回・名古屋支部例会記：井野川重則	49
日本鞘翅目学会第9回総会：斎藤明子	50
会務のご案内	36
会員動静	52
1984年度会計報告	54

表紙題字：畠山千枝

Macromolorchus hirsuta (Mitono et Nishimura) スネケブカヒロコバネカミキリ
蜂類に擬態しているカミキリムシはよく知られている。また、ホソコバネカミキリ類
のように、捕えると腹部を曲げてハチが刺すような行動をとるものもある。しかし、本
種は後腿節先端の尖で実際に刺す行為をとる。

本種を前方から指で捕えると、後肢を上翅の上で合わせ、跗節を曲げてよく発達した
後腿節先端の尖を左右そろえて前方へ突き刺す。

何回かに1回はこの尖が皮膚を貫通して痛みを感じることがある。

(写真・文：斎藤秀生)

日本産カミキリ大図鑑(1984)の分布の追加と訂正

穂積 俊文

日本鞘翅目学会編「日本産カミキリ大図鑑」には、初めて県別の分布図が掲載された。この分布図は、*Pidonia* ヒメハナカミキリ属を除いたカミキリムシの大部分について、まず私が分布図を作成し、草間博士が補正しトレースして印刷されたものである。

私は1981年12月末までの資料で作図し、82年春に原稿を送った。しかし発刊までに2年8ヶ月ほどの期間があり、その間原稿が眠ってしまったため、新たな記録の追記がほとんどできなかった。また分布に関する校正についても極く一部しか送られてこなかった。そのため発行された図鑑は、発刊時には校正もれや追加記録が入っていない不完全な分布図となってしまった。そこで、本誌上でこれらの訂正および追加を行なうこととした。

1) 種名の前の番号は大図鑑に使用されている種番号と対応させた。なお*Pidonia* 属(56-96)は取り扱わなかった。

2) 今回引用した文献は1985年4月30日時発行までのものである。引用文献一覧では報文タイトルは省略した。また基本的には著者のアルファベット順であるが、358-364については後の追加文献となってしまったため順序末に置いた。

3) 大図鑑の訂正については、分布図または説明文のいずれかに記録地が記述されていない種についても取り扱った。さらに、大図鑑中で分布図の実線は記録されている県、破線は採集されているが未発表であることを意味しているが、これが変更された場合も今回取り上げて記述した。

日本産カミキリムシ種名別分布追加・訂正 (1985年4月30日時点)

3, コゲチャヒラタカミキリ	鹿児島 ⁸⁾	種子島 ¹⁷²⁾
5, ベーツヒラタカミキリ	大分 ⁷²⁾	平戸島 ¹⁵⁷⁾ 種子島 ¹⁷²⁾
9, ウスバカミキリ	奥尻島 ¹⁷⁶⁾	平戸島 ¹⁵⁷⁾
11, ノコギリカミキリ	天草下島 ²³³⁾	
12, ニセノコギリカミキリ	佐賀加唐島 ²²⁶⁾	
14, コバネカミキリ	宮城 ¹³²⁾ 平戸島 ^{354) 157)}	種子島(<i>insularis</i>) ¹⁷²⁾
		沖縄本島(<i>insularis</i>) ²⁹⁶⁾
16, クロカミキリ	利島(伊豆) ²³⁾	静岡県初島 ¹³³⁾ 香川県与島 ³⁰⁸⁾
	愛媛県大島 ⁶⁵⁾	佐賀県加唐島 ²²⁶⁾

17, ケブカヒラタカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	福井 ²⁴³⁾	京都 ^{225) 301)}	宮島 ¹²⁸⁾	長崎 ¹⁴⁾
18, サビカミキリ	静岡県初島 ¹³³⁾		香川県与島 ³⁰⁸⁾	佐賀県加唐島 ²²⁶⁾	
	五島列島若松島 ⁵⁵⁾				
20, ツシマムナクボカミキリ		下甑島 ⁶⁴⁾			
21, オオクロカミキリ		佐賀 ⁷⁰⁾			

屋久島の本種の記録は、小宮（1980）¹²³⁾が誤同定だろうと記したが、その後中根（1985）¹⁸⁹⁾は目録にあげている。ただデータが記していないので中根は実際に採集したのか、文献引用か全く不明である。おそらく文献引用であると思われる。この点はルリボシカミキリについても同様である。

23, オオマルクビヒラタカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	京都 ²⁹⁵⁾	和歌山 ¹¹⁸⁾	
25, カラマツカミキリ		山梨 ^{18) 51)}		
28, ケブカマルクビカミキリ		山梨 ²⁾	京都 ²⁷³⁾	
29, ホソカミキリ	秋田 ^{258) 324)}	千葉 ^{28) 153)}	礼文島 ⁹³⁾	平戸島 ¹⁵⁷⁾
		種子島(yakushima)	¹⁷²⁾	
31, ケブトハナカミキリ	富山 ^{58) 101)}	兵庫 ¹⁹¹⁾		
32, テツイロハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	群馬 ^{30) 182)}		
33, ハイイロハナカミキリ	新潟 ³⁴⁶⁾	埼玉 ³³⁴⁾		

岩手は未発表種に変更（平野修一氏→草間氏私信）。

35, ニセハイイロハナカミキリ 福井は取消し、未記録である。

青木（昆虫40（3）：162－173、1972）の論文中のItoshiro (Fukui Pref) を引用したが、この地名は岐阜県郡上郡白鳥町石徹白（イトシロ）のこと、地図を見間違えて論文を書いたらしい。

37, ヒラヤマコブハナカミキリ	長野 ³⁵⁾	福井 ²⁵⁰⁾	広島 ³⁴⁷⁾	
38, ムナコブハナカミキリ		福井 ²⁵¹⁾		
39, フタコブルリハナカミキリ	宮城 ⁴³⁾	愛知 ¹⁰⁶⁾		
40, モモグロハナカミキリ		福岡 ³¹⁴⁾		
42, キベリカタビロハナカミキリ	福島 ³³³⁾			
43, フタスジカタビロハナカミキリ	富山 ¹¹⁵⁾	滋賀 ⁷¹⁾	島根 ⁶⁷⁾	
47, カラカネハナカミキリ	滋賀 ²⁸⁸⁾	利尻島 ²⁶⁰⁾		
49, クビアカハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	福井 ²⁴³⁾	大分 ²⁵⁵⁾	
50, ニセハムシハナカミキリ	岐阜 ^{103) 266)}	滋賀の“？”	は取消し、	

新保（琵琶湖国定公園学術調査報告書：373－438、1971）の記録はミスプリントの文献を、そのまま引用してある。

51, キバネニセハムシハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾			
52, ピックニセハムシハナカミキリ	群馬 ¹⁸²⁾	新潟 ²⁷²⁾	富山 ^{94) 100) 113) 331)}	
53, アカイロニセハムシハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	新潟 ^{185) 341) 343)}		
57, チャイロヒメコブハナカミキリ	福島 ²³⁹⁾	奈良 ¹⁷¹⁾	岡山(shikokensis) ³²⁸⁾	
97, チビハナカミキリ	大阪 ²²²⁾	利尻島 ⁵³⁾		
100, ヘリウスハナカミキリ	福島 ⁸⁵⁾	富山 ^{98) 116) 216) 331)}	平戸島 ³⁵⁴⁾	
101, ヒゲブトハナカミキリ	群馬 ¹⁸²⁾	山梨 ⁵⁹⁾		

106, ヤマトキモンハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾
107, マルガタハナカミキリ	青森 ^{213) 265)} 秋田 ²⁵⁸⁾
109, チャボハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 滋賀 ²⁹⁰⁾
112, ミヤマルリハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 富山 ¹⁰¹⁾
113, ミヤマクロハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 平戸島 ^{157) 354)} 種子島 ¹⁷²⁾

大阪は記録種として取扱われているが、未発表種である（水野弘造氏→草間氏私信）。

114, クロルリハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾
115, ルリハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 大阪 ²²¹⁾ 利尻島 ^{3) 320)}
116, ヒメアカハナカミキリ	大阪 ²²¹⁾
118, ツヤケシハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 佐賀県加唐島 ²²⁶⁾
120, アカハナカミキリ	奥尻島 ⁶¹⁾ 沖縄本島 ¹⁴⁶⁾
122, イガブチヒゲハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾
125, クロハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾
127, キモンハナカミキリ	秋田 ^{29) 258)} 群馬 ¹⁸²⁾
128, ヤツボシハナカミキリ	福岡県能古島 ²⁷⁵⁾ 佐賀県加唐島 ²²⁶⁾ 天草下島 ²³³⁾
130, ヨツスジハナカミキリ	天草下島(<i>ochrotela</i>) ²³³⁾
134, ハネビロハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾
135, フタスジハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 滋賀 ²⁹⁰⁾ 奥尻島 ⁷⁾
137, カタキナハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 富山 ^{100) 101)}
139, オオヨツスジハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾
140, セアカハナカミキリ	福井 ²⁴²⁾ 徳島は取消しで、未記録に変更 ⁴⁶⁾
141, モモブトハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 埼玉 ³³⁴⁾
142, カエデノヘリグロハナカミキリ	富山 ²¹⁹⁾ 岐阜 ²¹⁴⁾ 愛知 ^{60) 102) 294)} 奥尻島 ³²²⁾
143, クロサワヘリグロハナカミキリ	高知 ³⁵⁶⁾
145, アオバホソハナカミキリ	大阪 ^{118) 221)}
146, ニョウホウホソハナカミキリ	山形は未発表に変更（黒沢良彦氏→草間氏私信）。
148, ホソハナカミキリ	新潟 ³⁴¹⁾ 平戸島 ¹⁵⁷⁾ 天草下島 ²³³⁾
149, タテジマホソハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 新潟 ³⁴¹⁾ 大阪 ⁷⁵⁾ 天草下島 ²³³⁾
150, ニンフホソハナカミキリ	平戸島 ¹⁵⁷⁾ 天草下島 ²³³⁾
151, ミヤマホソハナカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 佐賀 ⁷⁰⁾ 宮島 ¹²⁸⁾
152, ハコネホソハナカミキリ	新潟 ^{341) 346)} 奈良 ^{236) 297)} 大阪 ²²²⁾

山形は未発表種（大桃定洋氏採集→草間氏私信）。なお黒沢の記録（昆虫界10（106）：779—795、1942）は誤りである（黒沢良彦氏→草間氏私信）。

155, コウヤホソハナカミキリ	青森 ¹⁶⁰⁾ 秋田 ²⁵⁸⁾ 富山 ^{100) 101)} 大阪 ²²¹⁾
156, タケウチホソハナカミキリ	岐阜 ²⁶⁴⁾
158, ジャコウホソハナカミキリ	富山 ¹⁰⁰⁾ 長崎 ⁵⁶⁾ 平戸島 ^{157) 354)} 天草下島 ²³³⁾
159, クロソンホソハナカミキリ	奈良は取消し未記録県 ⁸⁰⁾ とし、三重に変更。採集地の桃の木小屋 は三重県宮川村にある。

161, ベニバハナカミキリ	富山 ⁹⁹⁾	宮島 ¹²⁸⁾	平戸島 ¹⁵⁷⁾
163, ヒイロハナカミキリ	大分 ⁷²⁾		
165, キヌツヤハナカミキリ	宮城 ¹³²⁾		
167, オニホソコバネカミキリ	愛知 ⁶⁰⁾	奈良 ³¹⁹⁾	
173, オオホソコバネカミキリ	富山 ^{101) 112) 113)}	京都 ⁴²⁾	
174, クロホソコバネカミキリ	新潟 ^{185) 343) 346)}	愛知 ⁴⁰⁾	
175, ヒゲジロホソコバネカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	富山 ^{101) 112) 113)}	岐阜 ¹⁰⁵⁾
176, トガリバホソコバネカミキリ	岐阜 ¹⁰⁵⁾		
177, アオスジカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	京都 ³⁴⁸⁾	和歌山県友ヶ島 ⁶³⁾ 佐賀県馬渡島 ²²⁴⁾
			佐賀県加唐島 ²²⁶⁾
178, オガサワラチャイロカミキリ	対馬 ^{8) 361)}	平戸島 ¹⁵⁸⁾	種子島 ¹⁷²⁾
179, ベーツヤサカミキリ	長野 ⁵⁰⁾	福井 ³¹²⁾	大阪 ¹¹⁸⁾ 和歌山 ¹⁴⁷⁾ 平戸島 ¹⁵⁷⁾
180, ミヤマカミキリ	群馬 ^{122) 182)}	佐賀県馬渡島 ²²⁴⁾	佐賀県加唐島 ²²⁶⁾
		平戸島 ¹⁵⁷⁾	天草下島 ²³³⁾
183, キマダラカミキリ			和歌山県友ヶ島 ⁶³⁾
185, キイロミヤマカミキリ	大分 ^{200) 304) 305)}		
186, マルクビケマダラカミキリ	群馬 ¹⁸²⁾	愛媛 ⁸⁶⁾	宮島 ¹²⁸⁾
192, トビイロカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	宮城 ⁴³⁾	群馬 ¹⁸²⁾ 大阪 ²²²⁾ 佐渡 ³⁴²⁾
193, トゲヒゲトビイロカミキリ	佐賀県馬渡島 ²⁷⁴⁾		平戸島 ¹⁵⁷⁾
196, ヨツボシカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾		
197, アメイロカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	栃木 ³⁰⁷⁾	富山 ¹⁰⁰⁾ 天草下島 ²³³⁾
198, ヨコヤマヒメカミキリ	宮城 ⁴³⁾	京都 ^{210) 301)}	山形県飛島 ²³⁰⁾ 静岡県初島 ¹³³⁾
199, ヒゲナガヒメカミキリ			兵庫県家島 ³¹¹⁾ 鹿児島県草垣島 ²³¹⁾
			富山 ^{101) 298)} 京都 ^{210) 301)} 高知 ^{194) 223)} 慶本 ²⁷⁶⁾
200, テツイロヒメカミキリ	宮古島 ¹⁴²⁾		
201, リュウキュウヒメカミキリ	山口 ¹⁵⁵⁾		出典不詳のため下甑島は取消し
204, チャイロヒメカミキリ	下甑島 ⁶⁴⁾		
208, トワダムモンメダカカミキリ	高知(<i>flavopubescens</i>) ²²³⁾		
209, タカオメダカカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	新潟 ^{136) 341)}	岐阜 ²¹⁴⁾ 福岡 ¹⁵⁰⁾ 熊本 ¹²⁾
210, タイワンメダカカミキリ	利尻島 ⁵³⁾		
211, カッコウメダカカミキリ	富山 ^{101) 116) 331)}		島根 ¹²⁰⁾
213, キイロメダカカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	京都 ^{210) 301)}	和歌山 ^{149) 203)} 飛島 ²⁴⁵⁾
222, サドチビアメイロカミキリ	和歌山県黒島と大島 ²⁰²⁾	平戸島 ¹⁵⁷⁾	天草下島 ²³³⁾
227, ヤマトチビコバネカミキリ	京都 ^{210) 300) 301)}	高知 ⁴⁶⁾	種子島 ¹⁷²⁾
229, クロサワヒメコバネカミキリ	和歌山 ³¹⁵⁾	宮島 ^{128) 199)}	
	富山 ²¹⁹⁾	愛知 ²⁹⁴⁾	京都 ⁴²⁾
	岐阜 ^{45) 215)}	京都 ⁴²⁾	宮島 ^{128) 198)}
	福井 ³¹³⁾		

- 231, リョウブモモブトヒメコバネカミキリ 平戸島¹⁵⁸⁾ 種子島¹⁷²⁾
 233, ツヤケシヒゲナガコバネカミキリ 高知^{69) 180) 223)} 種子島¹⁷²⁾
 236, シバタヒゲナガコバネカミキリ 種子島¹⁷²⁾
 239, クロツヤヒゲナガコバネカミキリ 東京¹⁶⁸⁾
 241, ホソツヤヒゲナガコバネカミキリ 岐阜⁸¹⁾ 栃木は引用不詳のため “?” とする。
 242, オダヒゲナガコバネカミキリ 茨城²⁵⁾ 富山¹⁰¹⁾ 大分¹⁶⁴⁾
 243, コジマヒゲナガコバネカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 滋賀²⁸⁶⁾ 大阪¹⁹¹⁾ 宮島¹²⁸⁾
 天草下島²³³⁾ 種子島¹⁷²⁾
 244, カエデヒゲナガコバネカミキリ 岐阜¹⁰⁸⁾ 和歌山^{148) 316)}
 245, コボトケヒゲナガコバネカミキリ 岐阜²¹⁴⁾ 大分^{72) 162) 164) 355)}

南雄二氏が九重山で採集された標本を送ってこられ、草間、高桑、露木の三氏が確認した。南氏に感謝する。

佐渡島：未発表だが、佐渡博物館に収蔵されているのを露木繁雄氏が確認している。

- 246, ニッポンモモブトコバネカミキリ 下甑島⁶⁴⁾ 渡嘉敷島(*okinawana*)²²⁸⁾
 250, トラフホソバネカミキリ 山梨³¹⁾ 富山²¹⁹⁾ 飛島²³⁰⁾ 種子島¹⁷²⁾
 251, ムモンチャイロホソバネカミキリ 下甑島は未発表に変更。
 252, クスベニカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 種子島¹⁷²⁾
 256, ルリボシカミキリ 奥尻島⁷⁾

最近中根は屋久島をあげたが、¹⁸⁹⁾ オオクロカミキリの項に書いたように “?” である。

- 260, ミドリカミキリ 青森³⁴⁰⁾ 宮城¹³²⁾ 愛媛県伯方島¹⁷⁸⁾ 種子島¹⁷²⁾
 262, ヤクシマミドリカミキリ 種子島¹⁷²⁾
 264, アカアシオオアオカミキリ 福島^{139) 302)} 新潟⁸⁹⁾

京都は未発表種に変更（水野弘造氏→草間氏私信）。

- 265, アオカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 大阪¹⁹¹⁾ 鳥取³²⁹⁾ 奥尻島⁷⁾
 271, ヒメスギカミキリ 八丈島¹⁶⁾ 青ヶ島^{9) 24)} 天草下島²³³⁾
 272, ビャクシンカミキリ 神奈川⁷³⁾
 273, スギカミキリ 秋田²⁵⁸⁾
 274, チャイロホソヒラタカミキリ 秋田^{1) 76) 258)} 宮城¹³²⁾ 三重^{49) 151) 204)} 大阪^{190) 191) 292)}
 275, チャイロチビヒラタカミキリ 奈良³¹⁰⁾ 徳島¹⁸⁷⁾ 秋田は取消し、根拠不詳である。
 276, アカネカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 富山^{100) 101) 331)}
 277, ヨツボシチビヒラタカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 福井²⁵⁰⁾ 京都⁴²⁾ 三重⁶⁾ 熊本¹⁵⁹⁾
 278, シロオビチビヒラタカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 富山^{100) 113)} 利尻島²⁶⁰⁾ 奥尻島^{211) 322)} 種子島¹⁷²⁾
 279, オオトラカミキリ 岐阜²²⁰⁾ 高知¹⁹⁵⁾
 280, トラフカミキリ 神奈川県猿島²²⁹⁾ 隠岐⁸²⁾ 佐賀県加唐島²²⁶⁾ 種子島⁵²⁾
 宮城は未発表に変更
 281, ヤノトラカミキリ 鹿児島¹⁶⁷⁾
 282, キジマトラカミキリ 新潟^{185) 346)}
 283, ニイジマトラカミキリ 下甑島⁶⁴⁾

284, ブドウトラカミキリ	秋田 ^{1) 76)} 258) 広島県向島 ⁶⁵⁾	群馬 ¹⁸²⁾ 対馬 ^{145) 269)}	飛島 ²⁴⁵⁾	粟島 ^{33) 34)}
289, ウスイロトラカミキリ	奥尻島 ^{7) 176)}	平戸島 ¹⁵⁷⁾	下甑島 ⁶⁴⁾	
293, クビアカトラカミキリ	天草下島 ²³³⁾	佐渡は取消し、文献引用ミスである。		
294, ムネマダラトラカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾ 小浜島(<i>bisiniapicalis</i>) ¹⁷⁾	岩手 ^{37) 92)} 愛知 ¹⁰⁷⁾	福井 ²⁵⁰⁾ 天草下島 ²³³⁾	平戸島 ¹⁵⁷⁾ 種子島 ¹⁷²⁾
296, ズマルトラカミキリ				
301, クリストフコトラカミキリ	神奈川 ¹⁹²⁾	富山 ^{94) 100) 113)}	島根 ³⁵³⁾	
302, コトラカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾			
303, ヤマトシロオビトラカミキリ	三重 ⁹⁵⁾			
304, シラケトラカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	天草下島 ²³³⁾		
305, シロオビトラカミキリ	宮城 ²⁸⁰⁾			
306, キンケトラカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾			
310, キュウシュウチビトラカミキリ	平戸島 ¹⁵⁷⁾			
312, アカネトラカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	宮島 ^{128) 199)}		
314, キスジトラカミキリ	宮城 ^{43) 132)}			
318, エグリトラカミキリ	秋田 ^{1) 258)}	宮城 ^{43) 132)}	礼文島 ²⁷⁷⁾	香川県櫃石島 ³⁰⁹⁾
	福岡県能古島 ²⁷⁵⁾	天草下島 ²³³⁾		
319, クロトラカミキリ	宮城 ¹³²⁾	長崎は未発表に変更。		
320, ヤエヤマトラカミキリ	与論島 ⁷⁴⁾			
324, ヨツスジトラカミキリ				

島嶼は記録が多く、島名を記述すると煩わしいので省略。日本海側は福井県雄島以西の島々、太平洋側は愛知県から以西、与那国島までの島々に分布しているが、不思議にも伊豆諸島には記録がない。

326, タケトラカミキリ	青森 ³⁴⁰⁾	静岡県初島 ¹³³⁾	平戸島 ¹⁵⁷⁾
330, カノミドリトラカミキリ	種子島 ¹⁷²⁾		
331, フタオビミドリトラカミキリ	静岡県初島 ¹³³⁾	三重県菅島 ¹⁰⁹⁾	男女群島 ¹⁴⁴⁾
伊豆諸島は分布図にあるが、文章になし、各島に記録あり。			
332, トウキョウトラカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾		
334, ホソトラカミキリ	佐賀 ⁷⁰⁾		
335, ヒメクロトラカミキリ	神奈川県猿島 ²²⁹⁾	和歌山県友ヶ島 ⁶³⁾	種子島 ¹⁷²⁾
竹ヶ島は取消し、文献引用ミスである。			
337, カンボウトラカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	大阪 ²²²⁾	
338, キイロトラカミキリ	長崎 ⁵⁶⁾	宮島 ⁵⁾	佐賀県加唐島 ²²⁶⁾
			長崎県黒子島 ¹⁵⁶⁾
	平戸島 ¹⁵⁷⁾		
339, トゲヒゲトラカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾	宮城 ^{43) 132)}	淡路島 ⁸⁷⁾
343, シロトラカミキリ	秋田 ²⁵⁸⁾		福江島は未発表に変更。
344, アカジマトラカミキリ	新潟 ⁸⁹⁾	愛知 ¹⁰⁴⁾	

- 345, シロヘリトラカミキリ 長野²⁶¹⁾
 346, スギノアカネトラカミキリ 南北海道^{129) 173) 321) 322)} 秋田²⁵⁸⁾
 347, トガリバアカネトラカミキリ 高知は “?” である⁴⁶⁾
 348, アラカワシロヘリトラカミキリ 鹿児島¹⁶⁵⁾ 種子島(*kumagensis*)¹⁷²⁾
 愛媛県松山市が原産地と記載されているが、偶産種か採集地ラベル間違いかであろう。^{46) 134)}
 349, マツシタトラカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 富山^{100) 101) 331)}
 350, エゾトラカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 新潟^{185) 344) 436)} 静岡⁴⁸⁾
 351, ケブカトラカミキリ 種子島¹⁷²⁾
 352, ホタルカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 紀州大島は三重県紀伊大島のミスプリント。
 353, クビアカモモブトホソカミキリ 三重²⁴⁷⁾ 種子島¹⁷²⁾
 354, タキグチモモブトホソカミキリ 種子島¹⁷²⁾
 356, ムモンベニカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 熊本¹⁵⁹⁾
 357, モンクロベニカミキリ

愛媛は矢野俊郎（松山昆虫同好会時報27：60－95、1963）の論文を引用して図鑑に書いた。矢野は鹿野忠雄論文（台湾博物学会々報94：19－28、1928）を引用している。私は久松定成氏の御好意で鹿野論文を検したが、ただ四国と記してあるのみで、採集年月日も採集地も書いてない不完全記録であった。したがって保留記録と考えてよい⁴⁶⁾。各種図鑑の四国分布の記述はすべて鹿野論文を引用している。しかし四国での代表的報文の楠・管では引用していない¹³⁴⁾。

- 358, ヘリグロベニカミキリ 秋田²⁵⁸⁾ 利尻島²⁶⁰⁾ 奥尻島¹⁷⁶⁾
 359, ベニカミキリ 佐賀県加唐島²²⁶⁾
 360, シロオビゴマフカミキリ 富山²¹⁷⁾ 淡路島⁸⁸⁾
 361, ヨツボシシロオビゴマフカミキリ 福島³¹⁷⁾ 宮島^{126) 127)}
 種子島は取消し、誤同定である¹⁷²⁾。北海道の “?” は取消し。

福王寺廉ら (jezoensis 1 : 13-19、1974) は旭川市郊外で採集と報告しているが、誤同定である（佐々木恵一氏→穂積私信）。

- 362, ゴマフカミキリ 宮城^{43) 132)} 飛島²³⁰⁾
 364, チャゴマフカミキリ 愛媛¹³⁴⁾ 徳島 “?” は取消し、未記録に変更。⁴⁶⁾
 366, イシガキゴマフカミキリ 八重山諸島黒島¹⁷⁾

*subkonoii*と発表してあるが、写真判定では新記載の *ssp. kashiwaii* であろう。

- 370, カタジロゴマフカミキリ 五島列島若松島⁵⁵⁾
 371, マダラゴマフカミキリ 富山²¹⁹⁾ 奈良³²⁶⁾ 広島^{4) 199)}
 372, フタスジゴマフカミキリ 下甑島(*kirishimana*)⁶⁴⁾
 373, ナガゴマフカミキリ 奥尻島⁷⁾ 静岡県初島¹³³⁾ 下甑島⁶⁴⁾ 奄美大島¹⁷⁴⁾
 374, タテスジゴマフカミキリ 種子島^{172) 335)}
 380, ウスアヤカミキリ 長崎県黒子島¹⁵⁶⁾ 平戸島¹⁵⁷⁾ 天草下島²³³⁾
 渡嘉敷島(*okinawana*)²²⁸⁾
 382, シナノクロフカミキリ 滋賀²⁸⁷⁾ 神奈川県猿島²²⁹⁾
 384, キンケチャイロカミキリ 種子島¹⁷²⁾

- 385, キクスイモドキカミキリ 青森^{263) 340)} 秋田²⁵⁹⁾ 新潟^{341) 343)} 福岡県沖ノ島¹¹⁾
 平戸島¹⁵⁷⁾ 下甑島⁶⁴⁾ 宮島は取消し、文献引用ミスである。
- 387, カノコサビカミキリ 埼玉^{183) 278)} 三重⁹⁵⁾ 山口¹⁵⁵⁾ 和歌山県友ヶ島⁶³⁾
 天草下島²³³⁾ 下甑島⁶⁴⁾
- 393, コブスジサビカミキリ 秋田²⁵⁹⁾ 広島県生口島⁶⁵⁾
- 394, クビジロカミキリ 青森²⁵⁷⁾
- 396, ヒシカミキリ 青森^{110) 265)}
- 398, ヒメアヤモンチビカミキリ 平戸島¹⁵⁷⁾
- 403, クリチビカミキリ 滋賀²⁸⁵⁾ 大阪¹⁹¹⁾
- 404, タイワンチビカミキリ 八重山諸島黒島(*ishigakii*)¹⁷⁾
- 406, アヤモンチビカミキリ 平戸島¹⁵⁷⁾
- 408, キボシチビカミキリ 千葉¹⁵⁴⁾ 兵庫^{138) 190) 191) 327)} 熊本²³⁵⁾ 鹿児島²⁹⁹⁾ 宮島¹²⁸⁾
- 409, ヒトオビチビカミキリ 秋田²⁵⁹⁾ 石川⁵⁷⁾ 大阪²²¹⁾ 広島¹⁹⁹⁾
- 411, シロオビチビカミキリ 秋田²⁵⁹⁾ 宮城¹³²⁾
- 414, ウスフタモンサビカミキリ 稚子島¹⁷²⁾
- 415, フタホシサビカミキリ 慶良間諸島阿嘉島²²⁸⁾
- 418, ゴマフサビカミキリ 慶良間諸島阿嘉島²²⁸⁾ 八重山諸島黒島¹⁷⁾
- 419, ツシマサビカミキリ 五島列島中通島²⁸⁴⁾
- 420, フサヒゲルリカミキリ 岐阜²¹⁴⁾ 岡山^{125) 238)}
- 422, タテジマカミキリ 茨城²²⁷⁾ 山梨¹¹⁹⁾ 淡路島⁸⁷⁾
- 423, ハスオビヒゲナガカカミキリ 秋田²⁵⁹⁾ 山形²⁴⁶⁾ 新潟^{341) 345)} 福岡県沖ノ島¹¹⁾
- 平戸島¹⁵⁷⁾ 天草下島²³³⁾ 下甑島⁶⁴⁾ 大阪は未発表に変更。
- 京都³⁵⁰⁾ 大分^{72) 256)} 宮島^{128) 198)} 五島列島中通島¹⁵⁾
- 慶良間諸島座間味島²²⁸⁾
- 426, シロスジドウボソカミキリ 秋田²⁵⁹⁾ 新潟^{185) 341) 346)} 富山^{100) 114)} 佐渡島²⁷¹⁾
- 428, タテスジドウボソカミキリ 茨城²⁵⁾ 富山²¹⁷⁾ 福井²⁵³⁾ 大阪¹⁹¹⁾
- 429, ドウボソカミキリ 平戸島¹⁵⁷⁾ 小豆島は取消し、文献引用ミスである。
- 431, ニイジマチビカミキリ 新潟³⁴¹⁾ 滋賀²⁸⁵⁾ 鹿児島²⁶⁾
- 436, アトジロサビカミキリ 秋田²⁵⁹⁾ 千葉²⁸⁾
- 437, クリサビカミキリ 秋田^{259) 324)} 富山^{101) 113)} 佐賀⁷⁰⁾
- 島根と香川は取消し、文献引用ミスである。
- 440, マルモンサビカミキリ 秋田^{1) 259)} 宮城¹³²⁾ 富山¹⁰¹⁾ 鹿児島¹⁶¹⁾
- 441, アトモンサビカミキリ 秋田²⁵⁹⁾ 宮城^{43) 132)} 静岡県初島¹³³⁾ 淡路島^{44) 65)}
 広島県生口島⁶⁵⁾ 平戸島¹⁵⁷⁾
- 紀州大島は三重県紀伊大島のミスプリント。
- 443, トガリシロオビサビカミキリ 秋田²⁵⁹⁾ 宮島¹²⁸⁾ 長崎県黒子島¹⁵⁶⁾
- 445, ナカジロサビカミキリ 秋田²⁵⁹⁾ 奥尻島²¹¹⁾ 淡路島⁸⁸⁾ 平戸島¹⁵⁷⁾ 福江島¹⁵⁾
 天草下島²³³⁾ 佐渡島は取消し、文献引用ミスである。

446, コブバネサビカミキリ	鹿児島県黒島 (<i>subcristipennis</i>) ¹⁹⁾ 143) 336) 口永良部島 (<i>subcristipennis</i>) ⁶⁸⁾ トカラ宝島 (<i>subcristipennis</i>) ¹⁴³⁾ 与那国島 (<i>iriomotei</i>) ¹⁴²⁾
447, ヨコスジサビカミキリ	八重山諸島黒島 ¹⁷⁾
448, ワモンサビカミキリ	茨城 ²⁵⁾ 富山 ^{100) 101)} 香川県与島 ⁶⁶⁾ 愛媛県睦月島 ²⁸²⁾ 福岡県能古島 ²⁷⁵⁾ 天草下島 ²³³⁾
455, クワサビカミキリ	富山 ¹¹³⁾
458, ハイイロヤハズカミキリ	群馬 ¹⁸²⁾ 岐阜 ^{205) 214)} 静岡県初島 ¹³³⁾ 神津島 ²¹⁾ 天草下島 ²³³⁾ 種子島 ¹⁷²⁾
462, アカガネカミキリ	秋田 ^{259) 324)} 奥尻島 ⁷⁾
	利尻島、礼文島は分布図に描かれ、文章の方は書きもれ。楠・菅（1978）は松山市横谷の標本が存在していると述べているが、搬入材からの発生か採集地ラベルの間違いか、何れかであろう ⁴⁶⁾ 。
470, イタヤカミキリ	利尻島 ²⁶⁰⁾ 分布図にあるが、文章にない。分布図が正しい。
473, シラフヒゲナガカミキリ	利尻島 ³²⁰⁾
474, ヒゲナガカミキリ	秋田 ^{259) 324)} 岩手 ³⁷⁾ 大阪 ²²¹⁾
	小田氏の大坂府の記録はシラフヒゲナガカミキリと発表してあるが、岩田隆太郎氏が再同定したところ本種であった。広島は取消し、宮島のみ ¹²⁸⁾ 。
476, マツノマダラカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 群馬 ¹⁸²⁾ 愛媛県大島 ⁵⁵⁾ 愛媛県睦月島 ²⁸²⁾ 佐賀県加唐島 ²²⁶⁾ 福江島 ⁵⁵⁾
477, ヒメヒゲナガカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 奥尻島 ^{7) 176)} 静岡県初島 ¹³³⁾ 平戸島 ¹⁵⁷⁾ 天草下島 (<i>meridianus</i> . 太田恭可氏私信) ^{54) 233)}
481, ゴマダラカミキリ	利尻島 ¹⁸⁴⁾ 奥尻島 ^{7) 176)} 飛島 ^{244) 267)} 佐渡島 ¹²¹⁾ 石川県舳倉島 ²³²⁾ 福井県雄島 ²⁴⁹⁾ 神奈川県猿島 ²²⁹⁾ 淡路島 ^{44) 65)} 家島 ³¹¹⁾ 小豆島 ³²⁾ 広島県生口島 ⁶⁵⁾ 宮島 ¹²⁸⁾ 周防大島 ¹⁷⁰⁾ 愛媛県睦月島 ²⁸²⁾ 愛媛県伯方島 ¹⁷⁷⁾ 筑前沖ノ島 ¹⁶⁹⁾ 佐賀県加唐島 ²²⁶⁾ 壱岐 ³¹⁸⁾ 平戸島 ¹⁵⁷⁾ 西彼高島 ⁸³⁾ 福江島 ¹⁵⁾ 天草下島 ²³³⁾ 下甑島 ⁶⁴⁾
484, センノキカミキリ	奥尻島 ¹⁷⁶⁾ 栗島 ³⁴⁾ 伊豆大島 ⁶²⁾ 宮島 ¹²⁸⁾ 福岡県沖ノ島 ¹¹⁾ 佐賀県馬渡島 ²²⁴⁾ 天草下島 ²³³⁾ 下甑島 ⁶⁴⁾ 種子島 ¹⁷²⁾ 五島列島 ¹⁵⁾
486, ピロウドカミキリ	三重県紀伊大島 ⁴⁷⁾ 佐賀県馬渡島 ²²⁴⁾
490, チャイロヒゲピロウドカミキリ	神奈川県猿島 ²²⁹⁾ 御藏島 ^{91) 283)}
491, ニセピロウドカミキリ	宮城 ¹³²⁾ 飛島 ²³⁰⁾ 静岡県初島 ¹³³⁾ 宮島 ¹²⁸⁾ 平戸島 ¹⁵⁷⁾ 天草下島 ^{201) 233)} 五島列島中通島 ⁵⁵⁾
494, ヒメピロウドカミキリ	滋賀 ³⁰³⁾ 岡山 ²³⁸⁾ 屋久島？ ¹⁵²⁾
496, ヤハズカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 奥尻島 ⁷⁾ 静岡県初島 ¹³³⁾ 下甑島 ⁶⁴⁾
500, キボシカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 群馬 ¹⁸²⁾ 広島県因島 ⁶⁶⁾ 尖角諸島 ²⁶⁸⁾
501, ホシベニカミキリ	岐阜 ³⁵⁹⁾ 静岡県初島 ¹³³⁾ 宮島 ¹²⁸⁾ 佐賀県加唐島 ²²⁶⁾

	下甑島 ⁶⁴⁾
502, ヨコヤマヒゲナガカミキリ	福島 ³³³⁾
503, チャボヒゲナガカミキリ	天草下島 ²³³⁾
509, クリイロシラホシカミキリ	竹ヶ島（徳島県）は取消し、文献引用ミスである。
511, クワカミキリ	島根 ²⁷⁾
514, シロスジカミキリ	広島県生口島 ⁶⁶⁾ 五島列島平島 ¹⁵⁾
515, ヒゲナガゴマフカミキリ	愛媛県伯方島 ¹⁷⁷⁾ 福岡県能古島 ²⁷⁵⁾ 佐賀県馬渡島 ²²⁴⁾
516, ハラアカコブカミキリ	佐賀県加唐島 ²²⁶⁾
517, タカサゴシロカミキリ	大阪 ¹⁹¹⁾ 奥尻島 ¹⁷⁶⁾
521, アサカミキリ	福岡県能古島 ²⁷⁵⁾
522, ムネホシシロカミキリ	福木 ³⁰⁷⁾
523, オオシロカミキリ	大分 ³⁰⁴⁾
524, シモフリナガヒゲカミキリ	粟島 ¹³¹⁾ 福岡県志賀島 ²⁰⁸⁾
525, エゾナガヒゲカミキリ	下甑島 ⁶⁴⁾
526, セミスジコブヒゲカミキリ	兵庫 ^{90) 138)} 高知 ^{193) 196)}
533, マルバネコブヒゲカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 宮城 ¹³²⁾ 平戸島 ¹⁵⁷⁾ 天草下島 ²³³⁾
535, フタモンアラゲカミキリ	福井 ²⁴³⁾ 岐阜 ²¹⁴⁾ 滋賀 ⁷⁷⁾ 鳥取 ³²⁹⁾
536, フタオビアラゲカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 滋賀 ^{289) 357)} 兵庫 ¹⁹¹⁾ 広島 ^{5) 199)} 島根 ¹²⁰⁾
537, ヒトオビアラゲカミキリ	富山 ^{100) 101) 331)} 大阪 ¹⁹¹⁾ 福岡沖ノ島 ¹¹⁾
538, ジュウジクロカミキリ	富山 ^{100) 101)}
539, カッコウカミキリ	富山 ²¹⁹⁾ 徳島 ¹⁸⁸⁾
540, チビコブカミキリ	新潟 ^{185) 346)} 岐阜 ²¹⁴⁾ 滋賀 ²⁸⁶⁾
543, クモノスモンサビカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 富山 ^{100) 331)}
544, クリイロチビケブカカミキリ	茨城 ²¹²⁾ 新潟 ^{185) 341)} 種子島 ¹⁷²⁾
545, ホソヒゲケブカカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 富山 ²¹⁷⁾
547, ハイイロツツクビカミキリ	青森 ^{22) 263) 265)} 新潟 ^{185) 341)} 岐阜 ²¹⁴⁾ 滋賀 ^{287) 288)}
551, ドイカミキリ	千葉 ³³²⁾ 富山 ²¹⁹⁾ 徳島 ¹⁸⁸⁾
552, コゲチャサビカミキリ	宮城 ¹³²⁾ 富山 ¹⁰¹⁾ 下甑島 ⁶⁴⁾ 種子島(<i>flavovariegata</i>) ¹⁷²⁾
554, キイロアラゲカミキリ	奄美群島枝手久島 ¹³⁵⁾
556, イボタサビカミキリ	兵庫 ¹¹⁷⁾ 屋久島 ⁴¹⁾
557, キバネアラゲカミキリ	山梨 ³⁰⁶⁾ 広島 ¹⁹⁹⁾
561, エゾトゲムネカミキリ	隠岐 ²⁷⁰⁾
563, オビレカミキリ	宮城 ¹³²⁾
	喜界島は取消し、根拠不詳である。

564, ヒメシラオビカミキリ	和歌山 ¹⁴⁹⁾	鳥取 ³³⁰⁾	広島 ⁵⁾
565, ネジロカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾		
569, スジマダラモモブトカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾	京都 ^{210) 301)}	佐渡島 ¹³⁷⁾ 佐賀県加唐島 ²²⁶⁾
570, ナカバヤシモモブトカミキリ	青森 ¹²⁴⁾	岩手 ³⁸⁾	群馬 ¹⁸²⁾ 福井 ²⁵⁴⁾ 三重 ^{141) 151)}
	和歌山 ³¹⁶⁾	島根 ¹⁷⁵⁾	広島 ¹⁹⁸⁾ 佐賀 ¹³⁾ 大分 ^{200) 255) 304)}
		宮島 ¹²⁸⁾	
571, ゴマダラモモブトカミキリ		奥尻島 ⁷⁾	奄美大島 ¹⁸¹⁾
572, ミヤマモモブトカミキリ	和歌山 ³²⁵⁾		
574, トゲバカミキリ	宮城 ¹³²⁾	富山 ^{101) 116)}	平戸島 ³⁶⁾ 天草下島 ²³³⁾
575, ホウノキトゲバカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾	富山 ¹⁰¹⁾	和歌山 ¹⁴⁰⁾ 徳島 ¹⁹⁷⁾
576, キュウシュウトゲバカミキリ	福井 ²⁴⁰⁾	島根 ⁷⁸⁾	愛媛 ¹⁷⁹⁾ 天草下島 ¹⁵⁹⁾
577, シマトゲバカミキリ	福岡 ^{338) 339)}	平戸島 ¹⁵⁷⁾	下甑島 ⁶⁴⁾ 種子島 ¹⁷²⁾
581, キッコウモンケシカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾	富山 ^{100) 101) 331)}	奥尻島 ⁷⁾
584, ガロアケシカミキリ	茨城 ²⁵⁾	富山 ^{100) 101)}	平戸島 ¹⁵⁷⁾ 下甑島 ⁶⁴⁾
585, アトモンマルケシカミキリ	富山 ^{101) 206)}	種子島 ^{172) 337)}	
592, ヨコグロケシカミキリ	新潟 ¹⁸⁶⁾		
596, クロオビトゲムネカミキリ	大分 ⁷²⁾	平戸島 ¹⁵⁷⁾	
601, ケシカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾	岩手 ²³⁷⁾	富山 ^{100) 101)} 静岡県初島 ¹³³⁾
		淡路島 ⁶⁶⁾	平戸島 ¹⁵⁷⁾
609, ルリカミキリ	新潟 ¹⁸⁵⁾	岐阜 ²¹⁴⁾	種子島 ¹⁷²⁾
612, トホシカミキリ	岩手 ¹¹¹⁾		
613, ヘリグロアオカミキリ	新潟 ¹⁸⁵⁾		
614, ムネモンヤツボシカミキリ	福井 ²⁵²⁾		
615, ニセヤツボシカミキリ	新潟 ^{185) 346)}		
617, プロイニングカミキリ	新潟 ^{185) 341) 343) 346)}	富山 ^{96) 100) 116)}	兵庫 ³⁶²⁾
618, シナカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾	福井 ²⁵⁰⁾	
619, ヤツメカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾	富山 ¹¹⁴⁾	平戸島 ¹⁵⁷⁾ 種子島 ¹⁷²⁾
620, ハンノアオカミキリ		京都(<i>chrysochloris</i>) ³⁰¹⁾	
		鹿児島(<i>chrysargyreia</i>) ^{166) 163) 299)}	
621, フチグロヤツボシカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾	神奈川 ^{10) 39) 279)}	富山 ^{97) 218)} 福井 ²⁵²⁾
623, ニセシラホシカミキリ		平戸島 ¹⁵⁷⁾	
624, ハンノキカミキリ		利尻島 ^{260) 322)}	
625, アサカミキリ	栃木 ³⁰⁷⁾	福岡 ²⁹³⁾	大分 ³⁰⁴⁾
626, ラミーカミキリ	平戸島 ¹⁵⁷⁾	天草下島 ²³³⁾	奄美大島 ⁸⁴⁾
627, ヒゲナガヒメルリカミキリ	富山 ¹⁹⁶⁾	岐阜 ²³⁴⁾	広島 ¹⁹⁹⁾ 種子島 ¹⁷²⁾
633, オニグルミノキモンカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾	新潟 ^{341) 346)}	富山 ²¹⁶⁾ 滋賀 ^{287) 288)}
		京都 ^{42) 349) 352)}	三重 ³⁵⁸⁾
635, ジュウニキボシカミキリ		神奈川 ¹⁹²⁾	

636, イッキキモンカミキリ	広島 ^{199) 347)}
638, シラホシカミキリ	奥尻島 ¹⁷⁶⁾ 平戸島 ¹⁵⁷⁾ 天草下島 ²³³⁾ 下甑島 ⁶⁴⁾
645, シラホシキクスイカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 富山 ¹⁰¹⁾
647, セミスジニセリンゴカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 佐賀 ^{70) 207)}
648, ヒゲナガシラホシカミキリ	秋田 ³²⁴⁾ 金華山島は未発表である。
649, クロニセリンゴカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 滋賀 ³⁶⁰⁾ 島根 ¹²⁰⁾
650, カツラカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 滋賀 ³⁰³⁾ 奈良 ^{236) 297)}
653, キクスイカミキリ	宮島 ¹²⁸⁾ 佐賀県加唐島 ²²⁶⁾ 平戸島 ¹⁵⁷⁾ 天草下島 ²³³⁾
	種子島 ¹⁷²⁾ 愛知県神島は三重県神島の誤り。
654, ヨツボシカミキリ	宮城 ¹³²⁾ 天草下島 ²³³⁾ 伊豆大島は取消し、文献引用ミスである。
655, ヘリグロリンゴカミキリ	奥尻島 ¹⁷⁶⁾ 伊豆利島 ²⁰⁾
656, ヒメリングカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 佐賀県加唐島 ²²⁶⁾
657, リンゴカミキリ	平戸島 ¹⁵⁷⁾ 天草下島 ²³³⁾ 紀伊大島は和歌山県大島の誤り。
658, ソボリンゴカミキリ	青森 ²⁶²⁾ 岩手 ¹¹¹⁾ 富山 ¹⁰⁰⁾ 福井 ²⁴¹⁾ 熊本 ¹³⁰⁾
659, ニセリンゴカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 富山 ¹⁰⁰⁾ 天草下島 ²³³⁾
662, ホソキリンゴカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 宮城 ^{43) 132)} 群馬は未発表に変更。
667, ホソリンゴカミキリ	秋田 ²⁵⁹⁾ 栃木 ³⁰⁷⁾ 大分 ^{72) 291)}

引用文献一覧

- 1) 阿部 仁 (1972) 生物秋田16: 27-34。
- 2) 安倍信明・武智昭一 (1985) 月刊むし (168) : 37。
- 3) 阿部芳久 (1978) 同誌 (86) : 30
- 4) 赤木克己 (1982) 広島虫の会々報 (21) : 27-28。
- 5) ———・岩本道彦 (1984) 同誌 (22) : 9-11。
- 6) 秋田勝己 (1983) ひらくら27(6) : 99。
- 7) 秋山秀雄 (1984) 月刊むし (161) : 40。
- 8) 天野昌次 (1984) 同誌 (166) : 43。
- 9) 青ヶ島の生活と文化 (1984)
- 10) 新井孝雄・武田雅志 (1983) 月刊むし (150) : 35
- 11) 荒巻健二他2名 (1983) KORASANA21 (1・2) : 22-28。
- 12) 有江敬助 (1983) 北九州の昆虫30(1) : 62。
- 13) 江口純正 (1974) 佐賀むし通信21: 92-94。
- 14) 江島正郎 (1983) 月刊むし (154) : 41
- 15) ———・他12名 (1981) 五島の生物: 247-332。
- 16) 遠藤 茂 (1984) 多摩虫8 (17) : 23。
- 17) 榎戸良裕 (1983) 月刊むし (143) : 34。
- 18) 藤森克彦 (1984) 山梨の昆虫 (22) : 534-541。
- 19) 藤田 宏 (1978) 月刊むし (92) : 16-25。
- 20) ——— (1981) 同誌 (121) : 35-36。
- 21) ——— (1982) 同誌 (132) : 36-37。
- 22) ——— (1982) 同誌 (135) : 13。
- 23) ——— (1982) 同誌 (141) : 27-28。
- 24) ——— (1983) 同誌 (148) : 38。
- 25) 藤原尚樹・大桃定洋 (1982) おとしふみ (11) : 21-27。
- 26) 二町一成 (1983) SATSUMA32(90): 258。

- 27) 後藤雅人 (1982) すかしば (16) : 25-26。
- 28) 羽鳥祐之 (1983) 清澄 (10) : 29-36。
- 29) 芳賀 馨 (1982) 月刊むし (138) : 37。
- 30) ———— (1983) 同誌 (154) : 10。
- 31) ———— (1984) 同誌 (161) : 41。
- 32) 林 匠夫 (1956) 続小豆島の自然: 12-17。
- 33) 横熊清治 (1952) 越佐昆虫同好会々報 6 (4) : 128-132。
- 34) ———— (1964) 長岡市立科博館研報 3 : 85-122。
- 35) ———— (1984) 月刊むし (156) : 34。
- 36) 平松信夫 (1955) こがねむし 4 (1) : 1-5。
- 37) 平野修一他 2 名 (1982) 岩手蟲乃會々報 (8) : 11-14。
- 38) 平野俊秀 (1983) 同誌 (10) : 4。
- 39) 平野幸彦 (1984) 神奈川虫報 (70) : 27-46。
- 40) 細川浩司 (1982) 月刊むし (141) : 31。
- 41) ———— (1983) 同誌 (154) : 24-25。
- 42) ———— (1984) 同誌 (165) : 37。
- 43) 保谷忠良 (1983) みやぎインセクト (5) : 1-6。
- 44) 堀田 久 (1971) PARNASSIUS (8) : 1-5。
- 45) 穂積俊文 (1984) 昆虫と自然 19 (14) : 27。
- 46) ————・小笠原隆 (1985) げんせい (46) : 19-35。
- 47) 市橋 甫 (1958) 佳香蝶 9 (33) : 31-35。
- 48) 市川恭治 (1982) 月刊むし (140) : 33-34。
- 49) 市岡孝朗 (1982) ひらくら 26 (5) : 60。
- 50) 井原道夫 (1982) まつむし (65) : 36。
- 51) 池田清彦 (1985) 月刊むし (167) : 34。
- 52) 今中 宏 (1964) SATSUMA 13 (1) : 21-23。
- 53) 今坂正一 (1978) ELYTRA 6 (1) : 39。
- 54) ———— (1979) こがねむし (34) : 17。
- 55) 今坂正一・他 2 名 (1981) 五島の生物 : 325-330。
- 56) ————・緒方 健 (1985) こがねむし 45 : 16-21。
- 57) 井村正行 (1983) 月刊むし (153) : 39。
- 58) 稲田健一 (1982) 同誌 (139) : 31。
- 59) 稲垣 一 (1983) 同誌 (154) : 38。
- 60) 井野川重則 (1983) 同誌 (154) : 31-32。
- 61) 井上 潔 (1976) 同誌 (59) : 28。
- 62) 井上富夫 (1980) 同誌 (108) : 38。
- 63) 乾風 登他 2 名 (1953) 友ヶ島学術調査 : 253-273。
- 64) 入江平吉 (1981) 北九州の昆虫 28 (3) : 127-131。
- 65) 石原 保他 8 名 (1973) 本州四国連絡架橋に伴う周辺地域の自然環境のための調査報告書・学術調査編、動物部門 : 153-198。
- 66) ————他 8 名 (1974) 同上、同誌 (その 2) : 75-96。
- 67) 板倉宏文 (1984) すかしば (22) : 25。
- 68) 伊藤 淳・守屋健次 (1975) 月刊むし (50) : 24-27。
- 69) 伊藤 研・山岡幸雄 (1973) 四国虫報 18 : 87。
- 70) 伊藤達美 (1982) 北九州の昆虫 29 (3) : 187-191。
- 71) 伊藤徳造 (1985) 月刊むし (167) : 28。
- 72) 岩本常夫・佐々木茂美 (1982) 二豊のむし (8) : 19-30。
- 73) 岩瀬和夫 (1983) 月刊むし (154) : 41。
- 74) 岩田隆太郎 (1983) 月刊むし (154) : 38。
- 75) ————・松田 潔 (1983) 同誌 (153) : 35。
- 76) 出雲善浩 (1981) 月刊むし (122) : 33。
- 77) 新保友之・保積隆夫 (1979) 滋賀県の自然 : 801-889。
- 78) 常喜 豊・常喜晶子 (1983) 月刊むし

- (154) : 11。
- 79) 常楽武男 (1982) AMICA (27) : 99-128。
- 80) 鎌苅哲二 (1982) 月刊むし (139) : 30。
- 81) 亀沢 洋 (1982) 同誌 (137) : 34。
- 82) 神谷一男・山本 玄 (1984) 関西昆虫学会会報 (5) : 32-41。
- 83) 神谷寛之 (1953) こがねむし 3 (1) : 7-11。
- 84) 神園政行他 2名 (1977) LEBEN (15) : 37-55。
- 85) 鴨下 弘 (1984) 月刊むし (163) : 29。
- 86) 菅 晃 (1979) 愛媛の自然11: 表紙。
- 87) 金田昌士 (1978) PARNASSIUS (19) : 15。
- 88) ——— (1980) 同誌 (23) : 9。
- 89) 金子将人・山屋茂人 (1984) 越佐昆虫同好会々報 (59) : 22。
- 90) 加野 正 (1982) IRATSUME (6) : 36-41。
- 91) 柏崎 昭 (1982) 月刊むし (142) : 39。
- 92) 加藤良平 (1981) 岩手蟲乃會々報 (7) : 14。
- 93) 川田光政 (1979) jezoensis (6) : 109。
- 94) 川原 誠 (1981) 甲虫ニュース (54) : 6。
- 95) ——— (1982) ひらくら26 (2) : 31。
- 96) ——— (1982) 月刊むし (139) : 32。
- 97) ——— (1982) 同誌 (140) : 32。
- 98) ——— (1983) 同誌 (152) : 34。
- 99) ——— (1984) 同誌 (164) : 34-35。
- 100) ——— (1984) AMICA (28) : 1-14。
- 101) ———・北村征三郎 (1982) 同誌 (27) : 19-22。
- 102) 河路掛吾 (1982) 佳香蝶34 (131) : 53。
- 103) ——— (1982) 同誌34 (131) : 54。
- 104) ——— (1983) 月刊むし (154) : 28-29。
- 105) ——— (1984) 佳香蝶36 (138) : 31。
- 106) ——— (1984) 三河の昆虫 (31) : 155
- 158。
- 107) 河路掛吾 (1985) 月刊むし (167) : 29。
- 108) ———・深尾美和 (1980) 佳香蝶32 (123) : 41-43。
- 109) 河北 均 (1983) ひらくら27 (6) : 100。
- 110) 木戸博和 (1982) Celastrina (10) : 24-25。
- 111) 菊池信一・中村裕之 (1985) 月刊むし (169) : 40。
- 112) 北村征三郎 (1982) 佳香蝶 (130) : 39。
- 113) ——— (1982) AMICA (27) : 23-29。
- 114) ——— (1982) 同誌 (27) : 97。
- 115) ——— (1983) 月刊むし (154) : 24。
- 116) ——— (1984) AMICA (28) : 15-24。
- 117) 北山 昭 (1984) 月刊むし (162) : 30。
- 118) 小林賢三 (1932) 関西昆虫学会々報 (3) : 73-78。
- 119) 小林信之 (1984) 月刊むし (155) : 34。
- 120) 児玉 洋 (1984) すかしば (22) : 11-19。
- 121) 小池 寛 (1967) 佐渡博物館々報16: 4-16。
- 122) 小板橋秀治 (1933) 昆虫世界37 (436) : 17-21。
- 123) 小宮次郎 (1980) 月刊むし (113) : 7-19。
- 124) 今 純一 (1984) 同誌 (158) : 29。
- 125) 近藤要一 (1984) すずむし (119) : 21。
- 126) 小坂敏和 (1978) 広島虫の会々報 (17) : 9-12。
- 127) ——— 他 2名 (1977) 同誌 (16) : 11-14。
- 128) ——— 他 4名 (1984) 同誌 (23) : 1-12。
- 129) 工藤慎一 (1982) 月刊むし (135) : 32。
- 130) 日下部良康 (1983) 同誌 (149) : 32。
- 131) 草苅広一 (1977) 昆虫と自然12 (1) : 12。

- 132) 草薙広一 (1983) 山形昆虫同好会々誌
(12) : 17-20。
- 133) 草間慶一・市川恭治 (1982) 静岡の甲虫 1
(2) : 1-14。
- 134) 楠 博幸・菅 晃 (1978) 愛媛県立博物館
研究報告 (9) : 1-55。
- 135) 楠井善久 (1983) 越佐昆虫同好会々報 (56) : 8
- 136) ———— (1984) 同誌 (59) : 23-28。
- 137) ————・中野 潔 (1984) 同誌 (58) :
37-40。
- 138) 黒田 収 (1982) てんとうむし (8) : 13
-26。
- 139) 黒沢良彦 (1983) 甲虫ニュース (61) : 5。
- 140) 桑原幸男 (1982) KINOKUNI21:14。
- 141) 蒔田実造 (1982) ひらくら26 (5) : 61。
- 142) 榎原 寛 (1970) LEBEN 9: 2-15。
- 143) ———— (1977) ESAKIA10: 45-69。
- 144) ———— (1980) 同誌15: 49-73。
- 145) ———— (1980) 月刊むし 117: 53-58。
- 146) ———— (1983) 昆虫と自然18 (3) : 47。
- 147) 増尾耕司・桑原幸男 (1982) KINOKUNI
(22) : 18-20。
- 148) 的場 繢 (1982) 同誌 (22) : 24。
- 149) ———— (1983) 同誌 (24) : 14-15。
- 150) 松田勝毅 (1982) 北九州の昆虫29 (2) :
120。
- 151) 松井弘晃 (1983) ひらくら27 (6) : 100。
- 152) 松井 隆・佐藤洋吉 (1969) CRUDE (3)
: 7-9。
- 153) 松本裕一 (1982) 月刊むし (136) : 39。
- 154) ———— (1982) 同誌 (139) : 35。
- 155) 松永善明 (1983) 北九州の昆虫30 (2) :
119-122。
- 156) 松尾照男 (1982) こがねむし (39) : 15-
16。
- 157) ———— (1983) 北九州の昆虫30 (2) :
81-88。
- 158) ————・今坂正一 (1981) 月刊むし
- (130) : 5
- 159) 松崎誠之 (1981) 北九州の昆虫28 (3) :
167。
- 160) 三上隆司・佐藤 稔 (1981) 月刊むし
(130) : 27-28。
- 161) 南 雄二 (1982) SATSUMA31 (87) : 45。
- 162) ———— (1985) KORASANA23 (1) : 10。
- 163) ————・津田勝男 (1983) SATSUMA
32 (89) : 175-178。
- 164) ————・——— (1984) 北九州の昆虫
31 (1) : 29-38。
- 165) 三浦幹夫 (1981) 月刊むし (119) : 37。
- 166) ———— (1982) SATSUMA31 (87) : 41
-42。
- 167) ———— (1982) 同誌31 (87) : 45。
- 168) 三宅義一 (1984) 月刊むし (155) : 30。
- 169) 宮田 彰 (1977) 壱岐の生物 : 561-594。
- 170) 三好和雄 (1966) 山口県の自然2 (6) :
34-37。
- 171) 水野弘造 (1983) 月刊むし (154) : 27。
- 172) 森 一規 (1984) SATSUMA33 (92) :
106-126。
- 173) 森 正人 (1979) jezoensis (6) : 73-75。
- 174) 森島直哉 (1981) 月刊むし (122) : 39。
- 175) 森山正治 (1980) すかしば (14) : 5-8。
- 176) 棟方明陽 (1961) エゾシロ25: 1-19。
- 177) 村上和馬 (1959) 松山昆虫同好会時報 8 :
11-15。
- 178) ———— (1960) 同誌 9 : 4-6。
- 179) 村上構三 (1974) 徳島昆虫 (2) : 23-24。
- 180) ———— (1985) げんせい (46) : 7-12。
- 181) 村田文彦・豊島亮司 (1981) 月刊むし
(130) : 11-12。
- 182) 村田元彦 (1985) 同誌 (170) : 38。
- 183) 武藤 修 (1984) 同誌 (164) : 39。
- 184) 長尾 康 (1985) 同誌 (169) : 37。
- 185) 中林博之 (1982) 同誌 (140) : 26-27。
- 186) ———— (1983) 同誌 (147) : 32-33。

- 187 中川 健 (1982) 月刊むし (141) : 30。
- 188 ———・真野俊作 (1983) 同誌 (145) : 33-34。
- 189 中根猛彦 (1985) 屋久島の自然: 587-631。
- 190 仲田元亮 (1980) きべりはむし 8 (2) : 18-21。
- 191 ——— (1982) 能勢の昆虫、甲虫の部下。
- 192 中山和昭 (1985) 月刊むし (167) : 33。
- 193 中山紘一 (1980) げんせい (38・39) : 26。
- 194 ——— (1983) 宿毛湾地区産業公害総合事前調査90-91。
- 195 ——— (1984) げんせい (45) : 18。
- 196 ——— (1984) 月刊むし (166) : 13。
- 197 ——— (1985) げんせい (46) : 18。
- 198 中崎清隆・角島幸二 (1982) 広島虫の会々報 (21) : 23-25。
- 199 ——— 他3名 (1984) 同誌 (23) : 21-24。
- 200 中島三夫他2名 (1982) 二豊のむし (9) : 42。
- 201 直海俊一郎・直海晶二郎 (1977) 熊本昆虫同好会報22 (3) : 1-32。
- 202 奈良 一 (1970) 南紀生物12 (1) : 21-22。
- 203 ——— (1979) KINOKUNI (15) : 5-7。
- 204 生川展行他7名 (1984) 比奈知ダム周辺昆蟲類調査報告書: 137-191。
- 205 名和梅吉 (1938) 昆虫世界42 (485) : 2-4。
- 206 根來 尚 (1982) 富山市科学文化センター研究報告4 : 31-67。
- 207 西田光康 (1982) 北九州の昆虫29 (2) : 107-110。
- 208 ——— (1982) 同誌29 (2) : 110。
- 209 ——— (1983) 同誌30 (2) : 129-133。
- 210 西田信夫 (1981) Microcosm10 : 13-20。
- 211 西川直己 (1979) 甲虫ニュース (44) : 8。
- 212 西山 明 (1981) 月刊むし (126) : 38。
- 213 西沢登志樹 (1983) Celastrina (12) : 30。
- 214 野平照雄 (1982) 岐阜県の昆虫: 445-460。
- 215 ——— (1984) 啓蟹 2 (5) : 21。
- 216 野村孝昭 (1982) AMICA (27) : 292。
- 217 ——— (1984) 同誌 (28) : 29-31。
- 218 ——— (1984) 同誌 (28) : 32。
- 219 ——— (1984) 月刊むし (166) : 24。
- 220 野々部良一 (1984) 同誌 (166) : 6。
- 221 小田覚造 (1945) 昆虫科学4 (2) : 32-42。
- 222 ——— (1947) 同誌 5 (1) : 27。
- 223 小笠原隆・松村英一 (1984) げんせい(45) : 6。
- 224 緒方 健 (1982) 佐賀の昆虫 (12) : 55-68。
- 225 ———・北山 明 (1982) 月刊むし (133) : 32。
- 226 ———・野村周平 (1984) 佐賀の昆虫 (15) : 73-80。
- 227 萩沼正和 (1984) おけら (53) : 35-38。
- 228 小倉直樹 (1983) 月刊むし (154) : 39。
- 229 大場信義・楠井善久 (1979) 猿島の自然: 77-108。
- 230 大木 裕 (1983) 月刊むし (144) : 33。
- 231 大長光純 (1984) SATSUMA33 (91) : 73。
- 232 大野正男 (1970) 甲虫ニュース (8) : 5。
- 233 大田恭司 (1982) 北九州の昆虫29 (3) : 133-138。
- 234 大塚 篤 (1983) 月刊むし (144) : 35。
- 235 大塚 黙 (1980) 同誌 (109) : 36。
- 236 大林一夫 (1936) 関西昆虫雑誌 4 (1) : 13-17。
- 237 奥 昭夫 (1973) 二戸市を中心とする岩手県地方の蝶と天牛 (自費出版) : 12

- 20。
- 238 奥田好秀 (1984) 月刊むし (166) : 37。
- 239 斎藤明子 (1983) 同誌 (154) : 39。
- 240 斎藤秀生 (1983) 同誌 (154) : 46-47。
- 241 斎藤昌弘 (1980) 昆虫と自然15 (3) : 18。
- 242 ——— (1981) 同誌16 (7) : 32。
- 243 ——— (1983) 同誌18 (14) : 8。
- 244 桜井俊一 (1981) 同誌16 (4) : 42。
- 245 ——— (1981) 同誌16 (14) : 12-13。
- 246 ——— (1982) 山形昆虫同好会々誌 (11) : 22。
- 247 桜谷鎮雄・宗林正人 (1983) ひらくら27 (3) : 50-51。
- 248 佐々治寛之 (1970) 生物研究14 (3・4) : 59-60。
- 249 ——— (1976) 福井大学教育学部紀要 II部26: 27-57。
- 250 ——— (1981) 甲虫ニュース (54) : 7。
- 251 ——— (1982) 同誌 (60) : 8。
- 252 ——— (1982) 昆虫と自然17 (14) : 7。
- 253 ——— (1983) 同誌18 (14) : 6-7。
- 254 ——— (1984) 同誌19 (14) : 9-10。
- 255 佐々木茂美 (1984) 二豊のむし (12) : 17-25。
- 256 ———・倉品治男 (1982) 同誌 (9) : 34。
- 257 佐藤 明 (1983) 月刊むし (149) : 30。
- 258 佐藤福男・加納彦一 (1984) 同誌 (161) : 13-20。
- 259 ———・——— (1984) 同誌 (162)
- 260 佐藤雅夫・楠井善久 (1984) *jezoensis* (11) : 114-116。
- 261 佐藤正孝 (1983) 月刊むし (154) : 23。
- 262 佐藤隆志 (1982) 同誌 (136) : 37。
- 263 ——— (1984) *Celastrina* (13) : 18-20。
- 264 関根 忠 (1984) 月刊むし (166) : 13。
- 265 下山健作他 3名 (1982) 津軽半島の自然 : 107-153。
- 266 新堀豊彦・高桑正敏 (1982) 月刊むし (142) : 39。
- 267 白畑孝太郎・黒沢良彦 (1972) 鳥海山・飛島 : 218-262。
- 268 白石 哲・荒井秋晴 (1980) 尖閣諸島調査報告書: 60-63。
- 269 白水 隆・宮田 彰 (1976) 対馬の生物 : 567-764。
- 270 曾田貞滋・安達俊三 (1977) すかしば (8) : 19。
- 271 須藤弘文 (1984) 越佐昆虫同好会々報 (58) : 26。
- 272 ——— (1984) 同誌 (59) : 42。
- 273 助永隆雄 (1982) 月刊むし (139) : 35。
- 274 角田浩之他 2名 (1984) VITAE25:21-23。
- 275 ———・吉田睦浩 (1984) 同誌25: 23-25。
- 276 立川喜一 (1984) 熊本昆虫同好会報30 (2) : 10-14。
- 277 高橋秀男 (1982) 月刊むし (135) : 33。
- 278 ——— (1984) 同誌 (164) : 39。
- 279 高橋和弘 (1983) 同誌 (151) : 32。
- 280 高橋雄一 (1978) 仙台のこん虫: 41-48。
- 281 高桑正敏 (1984) 甲虫ニュース (66) : 7。
- 282 武智文彦・楠 博幸 (1959) 松山昆虫同好会時報8: 7-10。
- 283 武田雅志 (1983) 月刊むし (154) : 18。
- 284 武田 滋 (1981) 五島の生物: 700。
- 285 ——— (1983) Came虫2 (2) : 7-9。
- 286 ——— (1983) 同誌2 (3) : 14-15。
- 287 ——— (1983) 同誌2 (5) : 4-5。
- 288 ——— (1983) 同誌2 (6) : 2。
- 289 ——— (1983) 同誌3 (1) : 2-3。
- 290 ——— (1985) 同誌3 (6) : 9。
- 291 竹井直樹 (1983) 北九州の昆虫30 (1) : 61。

- 292 竹中 進 (1984) Crude (25) : 58。
- 293 竹下 富 (1984) 北九州の昆虫31 (2) : 124。
- 294 竹内克豊 (1983) 月刊むし (154) : 8。
- 295 竹内吉蔵 (1930) 関西昆虫学会々報 (1) : 74-77。
- 296 竹内幸夫 (1985) 月刊むし (170) : 39。
- 297 滝口 浩 (1934) 関西昆虫学会々報 (5) : 42-49。
- 298 田中忠次・山口 浩 (1982) AMICA (27) : 275-292。
- 299 田中和臣・津田勝男 (1980) SATSUMA 29 (84) : 164-225。
- 300 谷 寿一他 2名 (1979) Microcosm 6 : 3-28。
- 301 ———他 3名 (1981) 同誌11 : 11-20。
- 302 田添京二 (1984) 福島生物 (27) : 1-6。
- 303 寺村周太郎 (1955) 観察 5 (1) : 4-15。
- 304 寺山 武 (1982) 二豊のむし (9) : 40。
- 305 ———・堤内雄二 (1982) 同誌 (9) : 41。
- 306 筒井 謙 (1982) 月刊むし (140) : 30-31。
- 307 栃木県立博物館刊 (1984) 栃木県のカミキリムシ。
- 308 豊嶋 弘 (1980) 昭和54年度一般国道30号 (香川県側) 自然環境調査報告書 : 61-85。
- 309 ——— (1981) 昭和55年度一般国道30号 (香川県側) 自然環境調査報告書 : 83-97。
- 310 豊島正己 (1981) 月刊むし (125) : 34。
- 311 上田尚志 (1981) きべりはむし 9 (1) : 9-18。
- 312 上野輝久 (1984) 月刊むし (163) : 24。
- 313 ——— (1984) 同誌 (166) : 3。
- 314 梅林満智也 (1984) 北九州の昆虫30 (3) : 212。
- 315 梅本 実 (1982) KINOKUNI (22) : 21。
- 316 ——— (1982) 同誌 (22) : 21-24。
- 317 海野考司 (1981) 月刊むし (130) : 8。
- 318 浦川虎郎他 2名 (1977) 壱岐の生物 : 357-365。
- 319 浦田和義 (1984) 月刊むし (161) : 37。
- 320 早大生物同好会 (1980) 早稲田生物 (22) : 56-67。
- 321 渡辺英行 (1979) 蝦夷白蝶10 : 89-100。
- 322 ——— (1980) 同誌11 (1) : 41-72。
- 323 渡辺弘行 (1976) 京大農学部付属演習林集報11 : 9-28。
- 324 渡辺 徳 (1972) 十和田・八幡平国立公園学術調査報告 : 220-257。
- 325 八木正道 (1982) KINOKUNI (21) : 13。
- 326 山口雄志・岩田隆太郎 (1982) 月刊むし (141) : 26。
- 327 山地 治 (1980) すずむし (117) : 21。
- 328 ——— (1984) 同誌 (119) : 9。
- 329 ——— (1984) 同誌 (119) : 15-16。
- 330 ——— (1984) 同誌 (119) : 21-22。
- 331 山中 浩他 2名 (1984) AMICA (28) : 75-116。
- 332 山登明彦 (1982) 月刊むし (137) : 30。
- 333 ——— (1982) 同誌 (139) : 31-32。
- 334 ——— (1983) 同誌 (145) : 31-32。
- 335 山脇好之 (1960) 北九州の昆虫 7 (3) : 97-106。
- 336 ——— (1978) 同誌24 (3) : 101-104。
- 337 ——— (1980) 同誌27 (3) : 143-146。
- 338 ——— (1984) KORASANA22 (1・2) : 1-12。
- 339 ——— (1985) 同誌23 (1) : 5-8。
- 340 山谷文仁 (1939) 昆虫世界43 (499) : 17-21。
- 341 山屋茂人 (1984) 長岡市立科博館研報19 :

- 19-40。
- 342 山屋茂人 (1984) 越佐昆虫同好会々報
(58) : 36。
- 343) ———— (1984) 同誌 (59) : 31-37。
- 344) ———— (1984) 同誌 (59) : 38。
- 345) ————・樋熊清治 (1984) N H K45。
- 346) ————・佐藤達生 (1983) 越佐昆虫同好会々報 (56) : 39-48。
- 347) 矢野立志 (1984) 広島虫の会々報 (23) : 25-27。
- 348) 安川謙二 (1982) 月刊むし (132) : 34。
- 349) ———— (1982) 丹後若狭虫の会々報23 : 4。
- 350) ———— (1983) 丹後若狭の昆虫 (1) : 25。
- 351) 安川謙二 (1983) 丹後若狭の昆虫 (1) : 26。
- 352) ———— (1984) 丹後若狭Insect (31) : 5。
- 353) 淀江賢一郎 (1983) すかしば (20) : 45。
- 354) 吉武 明 (1981) 北九州の昆虫28 (3) : 126。
- 355) ———— (1984) 同誌31 (2) : 89-90。
- 356) 横山定郎 (1985) げんせい (46) : 18。
- 357) 湯沢宣久 (1975) 佳香蝶27 (101) : 15。
- 358) 中山和昭 (1983) 月刊むし (151) : 31-32。
- 359) 野平照雄 (1984) 啓蟹 2 (6) : 23-29。
- 360) 武田 滋 (1985) Came虫4 (1) : 14-15。
- 361) 田中 勇 (1983) 月刊むし (154) : 7。
- 362) 吉田 豊 (1984) てんとうむし (9) : 44。

(〒 485 小牧市小牧寺浦3326)

京都府産ナガクチキムシ科甲虫目録

Melandryidae (Coleoptera) of Kyoto Pref. Japan

水野 弘造

Kôzo MIZUNO

京都府におけるナガクチキムシ科甲虫について過去の記録を調べてみると20余種が報告されている。標本を再検したところ、このうち2種は誤同定と判明した。一方同好諸氏のコレクションに未記録（と思われる）種を苦干種確認することができたので、ここに訂正と追加を兼ね、かつ各種の確認された分布地を明示して府下の本科甲虫目録としてまとめてみた。

日本全国を都道府県別に見た場合、京都府は地勢的な非常に大きな特徴として、標高1,000m以上の山岳を欠く数少ない府県の一つである（他は千葉県と沖縄県のみ）ことが指摘できる。したがって京都府は山地性昆虫の産出数が他府県に比較して少いことが昆虫相の特色の一つとして上げられる。しかし京都大学芦生演習林のように比較的近年まで原生林がほぼ完全に保存された地域、あるいは、京都市街地周辺に見られるように景観上伐木を禁じられて照葉樹林のおもかげを色濃く残している森などにも恵まれて、本科甲虫の産出数は決して少くはないと思われる。日本海に面する府北部・丹後地方の調査は未だほとんど手をつけられておらず、本目録にまとめた記録はごく限られた範囲のものに過ぎないため、今後追加される種類や分布地は多数あろうと予想される。同好諸氏の今後の調査を期待したい。

京都はLewis以来多数の昆虫学者、昆虫採集家の活躍した土地であるから本科甲虫についても人目につきにくい報告があろうことが充分に推測されるが、これを詳査することは筆者には不可能なので、今回文献としては筆者のファイルに見出し得たものだけを引用した。見落している文献につきお気付きの節は御教示いただければ有難い。

なお、本目録に使用した種名に関しては文献番号（0）を基本とし（12）を参照した。目録中のA、B、Cは次の意味である。

A：文献による既知産地カッコ内は引用文献番号。

B：筆者の検視した標本データ（採集地、頭数、採集年月日、採集者名）。

C：註記。

京都府産ナガクチキムシ科甲虫目録

1. *Synchroa melanotoides* Lewis ヒメコメツキガタナガクチキ

A.	嵐山 (6)、芦生 (8)					
B.	芦生 1頭、14、VII、1972 水野弘造 杉峠 1頭、8、VII、1971 水野弘造 貴船 1頭、12、VII、1976 沢井 稔 大文字山 1頭、14、VII、1962 茂木幹義 伏見 1頭、29、VII、1960 細谷 K. 五雲峰 2頭、15、VI、1974 高橋 敏	久多 2頭、13、VII、1972 水野弘造 花脊峠 3頭、31、VII、1956 岸井 尚 比叡山 1頭、2、VII、1956 岸井 尚 醍醐山 2頭、22、VII、1974 高橋 □ 松尾 1頭、21、VII、1979 高橋 □				

C. 本種は現在はナガクチキムシ科から除外されることが多く、ヒラタナガクチキ科という独立科に分類されるかあるいはクビナガムシ科に入れられるが、本目録中には旧来通りナガクチキ科として記録しておく。

2. *Synstrophus macropthalmus* (Reitter) カツオガタナガクチキ

A.	嵐山 (6)、松尾 (13)、宇治 (13)					
B.	芦生 1頭、5、VII、1983 正木 清 嵐山 3頭、8、VII、1954 岸井 尚 稲荷山 1頭、10、X、1978 高橋 敏 天王山 1頭、23、V、1974 大平広士	杉峠 1頭、14、VI、1972 今坂正一 小倉山 1頭、10、IX、1953 岸井 尚 天ヶ瀬 3頭、4、V、1978 高橋 敏				

C. 低山地のきのこでは普通に見られるが、山地帯では少い。

3. *Eustrophus niponicus* Lewis ヒメカツオガタナガクチキ

A.	芦生 (8)					
B.	芦生 1頭、27、V、1973 水野弘造					
C.	本種は極めて稀な種で、全国的にも記録が少い。上記標本は大きなトチノキ生木の樹皮上のコケより得たものであるが、その後は採れていない。					

4. *Holostrophus lewisi* Csiki ヨツボシヒメナガクチキ

A.	京都 (2)、貴船 (8)、芦生 (9、10)					
B.	芦生 1頭、20、VI、1976 水野弘造 大悲山 1頭、22、V、1961 横山 創 鞍馬山 1頭、8、X、1978 正木 清 松ヶ崎 1頭、11、V、1972 今坂正一 天ヶ瀬 4頭、4、V、1978 高橋 敏	佐々野峠 1頭、2、VI、1984 平野雅親 貴船 1頭、26、V、1957 水野弘造 瓜生山 3頭、4、V、1980 細川浩司 大原野 1頭、11、V、1980 高橋 敏				

C. (2)によれば京都は古くから産地として知られていたようである。小型種の内では比較的多い方で枯木上によく見られる。

5. *Orchesia ocellaris* Lewis カバイロニセハナノミ

A.	嵐山 (6)、芦生 (8)、醍醐 (13)、五雲峰 (13)、宇治 (13)					
B.	太鼓山 1頭、9、VI、1983 八木正道	芦生 1頭、9、VI、1974 水野弘造				

杉峠	1頭、19、VI、1977	沢井 稔	鞍馬山	1頭、3、X、1978	正木 清
貴船	1頭、15、VI、1958	岸井 尚	雲ヶ畑	1頭、30、IX、1975	水野弘造
比叡山	1頭、4、VI、1958	岸井 尚	大原	1頭、8、VII、1956	岸井 尚
稻荷山	1頭、15、VII、1978	正木 清	醍醐山	1頭、23、IX、1978	高橋 敏
五雲峰	2頭、11、VI、1974	高橋 敏			

C. 平地から山地のきのこに見られ、訪花することもある。体色に変化があり、生態的にも訪花するものと菌上のものとが同一種か否か疑問があり、将来分類学的に検討されなければならない。

6. *Orchesia imitans* Lewis アカオビニセハナノミ

A. 芦生 (8) 、大原野 (13)					
B. 芦生	1頭、15、VII、1973	水野弘造	佐々里峠	1頭、23、IX、1984	水野弘造
久多	1頭、6、VIII、1972	水野弘造	八丁平	1頭、22、IX、1982	常喜 豊
花脊	2頭、18、IX、1981	常喜 豊	杉峠	1頭、10、V、1971	今坂正一
貴船	1頭、15、VI、1958	岸井 尚	鷲峰山	2頭、15、X、1975	水野弘造

C. 山地帯に普通で枯枝を叩くとよく落ちる。

7. *Orchesia deversenotata* Pic マルモンニセハナノミ

B. 太鼓山	1頭、9、VII、1983	八木正道	芦生	1頭、4、VII、1975	高橋 敏
杉峠	1頭、17、VI、1970	今坂正一	杉峠	1頭、19、VI、1977	沢井 稔

C. 本種の杉峠の標本について筆者はアヤモンニセハナノミ *O. elegantula* と誤同定して報告した (8) ので、ここに訂正する。

8. *Orchesia elegantula* Lewis アヤモンニセハナノミ

A. (杉峠) (8 : 誤同定による誤記録)					
B. 木村欣二氏より京都産の次の標本を所持している旨私信をいただいたので本目録に加えておく。					

芦生 1頭、26、V、1974 露木繁雄

9. *Serropalpus niponicus* Lewis キイロホソナガクチキ

A. 井手 (13)					
B. 比叡山(灯火)	2頭、1、X、1956	岸井 尚	鞍馬山	1頭、23、VIII、1961	土居祥児
愛宕山	1頭、9、X、1975	水野弘造	嵐山	1頭、24、VIII、1956	岸井 尚
稻荷山	1頭、15、VII、1978	正木 清	井手町	1頭、5、VII、1981	高橋 敏

C. 嵐山の本種標本を岸井 (6) はコメツキタナガクチキ *Paramikadonius crepusculus* と報告したが、本種の誤同定であったことが標本検視によって確定したのでここに訂正し、*crepusculus* は正式報告されるまでは京都のリストから削除しておく。本種は低山帯の松林に見出され、燈火にも飛来する。

10. *Mikadonius gracilis* Lewis キスジナガクチキ

A. 芦生 (8)					
B. 芦生	3頭、10、VI、1973	水野弘造	久多	1頭、5、VII、1975	水野弘造
C. 山地性の普通種であるが府下においてはあまり多くない。					

11. *Stenoxylyta trialbofasciata* (Hayashi et Kato) ミスジナガクチキ

- B. 佐々里峠 1頭、18、VI、1984 細川浩司
 C. 日本産ナガクチキ中隨一の大型美麗珍種で、クリ・ミズナラなどの立枯れに見られるという。
12. *Anisoxya ocularis* Nomura et Kato オオメヅカクシナガクチキ（新称）
 B. 嵐山（灯火）1頭、17、VII、1954 岸井 尚
 C. 本種は低山地で稀に灯火に飛来するものが將集される。（0）にはオオメホソナガクチキの和名が用いられているが、形態上適当でないようと思ふので上記のように新称を提唱したい。
13. *Abdera trisignata* Champion ミツボシケシナガクチキ（新称）
 A. 京都（1、模式產地）、芦生（8）、松尾（13）
 B. 芦生 1頭、3、VII、1976 水野弘造 花脊峠 1頭、20、VII、1956 岸井 尚
 松尾 1頭、3、VI、1979 高橋 敏
 C. Lewis の京都で採集した標本がタイプの一つになっている。松の切株のスエヒロタケに多いといふ。（0）ではミツボシホソナガクチキの和名となっているが、実体に即さないので上記の新称を提唱したい。
14. *Dircaeomorpha validicornis* (Lewis) ムツモンナガクチキ
 B. 佐々里峠 1頭、1、VII、1984 芦田 久
 C. 京都府の記録は現在のところ上記1例のみで、ヒゲブトナガクチキよりも明らかに少く他府県の状況とは逆になっている。
15. *Dircaeomorpha elegans* Sasaji ヒゲブトナガクチキ
 A. 大文字山（7、8）、芦生（8）
 B. 芦生 1頭、VII、1976 長田竜太郎 佐々里峠 1頭、30、VI、1984 細川浩司
 佐々里峠 1頭、22、VI、1985 大垣 誠 久多 1頭、9、VII、1972 水野弘造
 大文字山 1頭、11、VI、1960 茂木幹義 大文字山 1頭、30、V、1971 上野 K.
 C. 京都においては山地帯の広葉樹立枯れなどに見られるが稀である。
16. *Dircea erotoyloides* Lewis フタオビホソナガクチキ
 B. 佐々里峠 1頭、24、VI、1984 佐藤 学 佐々里峠 1頭、28、VII、1984 平野雅親
 C. 本種は広域分布種であるが個体数は少い。広葉樹立枯れに見られ、燈火にもよく飛来する。
17. *Dircea dentatomaculata* Lewis ハガタホソナガクチキ
 B. 宇治市五ヶ庄 1頭、6、V、1980 岩田隆太郎
 C. 本種は山地、低地を問わず分布するが稀である。
18. *Phloeotrya flavitarsis* (Lewis) キオビホソナガクチキ
 A. 芦生（8）
 B. 太鼓山 3頭、4、V、1983 八木正道 芦生 4頭、27、V、1973 水野弘造
 大悲山 1頭、24、V、1948 岸井 尚
 C. 山地帯には普通で夕刻よく飛翔する。
19. *Phloeotrya rugicollis* Marseul クロホソナガクチキ
 A. 芦生（8）
 B. 芦生 2頭、8、VII、1976 水野弘造 比叡山 1頭、30、V、1973 浦田和義

大文字山 2頭、11、VI、1960 茂木幹義 稲荷山 2頭、15、VII、1978 正木 清
C. 山地・低地を問わず、広葉樹の立枯れや倒木上に比較的普通に見られる。

20. *Phloeotrya obscura* (Lewis) ビロウドホソナガクチキ

A. 大原野 (13)、五雲峰 (13)、宇治 (13)

B. 芦生 1頭、20、V、1979 水野弘道 佐々里峠 3頭、5、VI、1977 沢井 稔
祖父谷 1頭、8、VI、1954 岸井 尚 杉峠 1頭、5、VI、1977 沢井 稔
宝ヶ池 1頭、6、V、1974 高橋 敏 北白川 1頭、6、V、1977 岩田隆太郎
大文字山 1頭、14、V、1976 岩田隆太郎 大原野 1頭、11、V、1980 高橋 敏
天ヶ瀬 1頭、4、VI、1974 高橋 敏 五雲峰 1頭、30、IV、1977 高橋 敏
月ヶ瀬口 (シデ材より羽化) 47頭、22、IV、1983 細川浩司

C. 山地・低地の別なく分布する普通種であり、材からは多数羽化する。

21. *Phloeotrya bellicosa* Lewis オオクロホソナガクチキ

A. 芦生 (8)

B. 芦生 7頭、30、VI、1951 岩井 尚

C. ブナ帯に分布する種で、立枯れに多い。京都では芦生でのみ得られている。

22. *Phloeotrya?* sp. クロチビヒラタホソナガクチキ (仮称)

A. 大原野 (13)、宇治 (13)

B. 貴船 1頭、5、V、1982 常喜 豊 大原野 1頭、11、V、1980 高橋 敏
天ヶ瀬 1頭、5、VI、1980 高橋 敏

C. 本種は黒色でやや扁平の小型種である。上記のほかに大阪府・兵庫県・岡山県などの低山・丘陵地で得られた標本を数頭検している。未記載種と思われ、British Museum (N. H.) の所蔵標本中にも種名を明示せずに並べられていたように記憶する。本種については現在佐々治教授により検討されているのでいずれ明らかにされよう。

23. *Hypulus acutangulus* Lewis トゲムネツツナガクチキ

A. 芦生 (8)

B. 芦生 1頭、30、V、1958 鴨脚慶夫 杉峠 1頭、30、V、1959 岩井 尚

C. 立枯れや枯枝上に稀に見られる。

24. *Hypulus cingulatus* Lewis ネアカツツナガクチキ

A. 芦生 (10)

B. 芦生 3頭、28、V、1978 中村俊彦

C. トチの巨木の枯枝樹皮下から得られた。美麗珍種で全国的にも多いものではない。

25. *Microtonus dimidiatus* Marseul フタモンヒメナガクチキ

A. 宇治 (13)

B. 嵐山 1頭、25、IV、1959 岸井 尚 天ヶ瀬 1頭、5、VI、1980 高橋 □

C. 全国的にみても山地帯よりもむしろ低地帯の記録が多い。

26. *Syphora miyakei miyakei* Nomura et Hayashi ミヤケヒメナガクチキ

A. 芦生 (8)

- B. 芦生 1頭、21、VI、1975 水野弘造 佐々里峠 1頭、24、VI、1984 佐藤 学
 芦生 1頭、10、VII、1966 水野弘造 大原 1頭、8、VII、1956 岸井 尚
 比叡山（灯火） 1頭、29、VI、1957 岸井 尚
- C. 本種は山地～低山地に稀でない。小型でハナノミなど他科の甲虫と形態が似ており、分類上もまだ細分される可能性がある。

27. *Stolius vagepictus* Lewis ヨツボシキバネナガクチキ

- A. 松尾 (13)
- B. 松尾 1♂、10、X、1979 高橋 敏
- C. 稀なようで府下では上記一例のみ。本種の♂は前脛節端部にヘラ状付属物を付け、全体の体形もクビナガムシ科に似る。原記載時はカミキリモドキ科の所属として記載された甲虫である。上翅斑紋の変異も多い。

28. *Phryganophilus ruficollis rosti* Hubenthal ムネアカナガクチキ

- A. 花脊峠 (4)、芦生 (8)
- B. 芦生 1頭、29、V、1974 横山美千子 久多 1頭、5、V、1973 水野弘造
 大悲山 1頭、16、V、1971 今坂正一 大布施 1頭、13、V、1973 山下 晶
 花脊峠 1頭、27、V、1954 垂井由継
- C. 本種は広く分布する種で、発生が5月の短期間に限られ、個体数が少ないので発見し難い種である。朽木上に見られ、訪花することもあると聞く。

29. *Ivania coccinea* Lewis セアカナガクチキ

- A. 芦生 (8)
- B. 芦生 4頭、13、VI、1976 水野弘造 佐々里峠 4頭、18、VI、1984 芦田 久
 杉峠 2頭、5、VI、1977 沢井 稔
- C. 美麗種である。普通に産し、発生樹では多数群れことがある。陽光中でもよく飛翔する。

30. *Bonzicus hypocrita* Lewis ボウズナガクチキ

- A. 貴船 (3)
- C. 本種は全国的には山地に普通であるが、京都においては稀なようで上記記録を見るのみ、筆者は未だ京都産の標本を検することができない。

31. *Prothalpia ordinaria* (Lewis) ヘリアカナガクチキ

- A. 大悲山 (8)、芦生 (9)
- B. 芦生 1頭、20、VI、1976 水野弘造 佐々里峠 2頭、2、VI、1984 平野弘造
 大悲山 1頭、28、V、1972 水野弘造 花脊峠 1頭、13、IV、1983 細川浩司
 芦生 7頭、1、VI、1958 岸井 尚 貴船 1頭、17、V、1957 水野弘造
- C. 本種は普通種であるにもかかわらず報告の少い種である。上翅の色が黒色から柿色まで変化し不定に自信を持ち難いのも一因であろう。

32. *Melandrya gloriosa* Lewis アオバナガクチキ

- A. 貴船 (3)、芦生 (8)、岩倉 (11)
- B. 芦生 4頭、11、V、1972 水野弘造 大悲山 1頭、18、V、1958 山口

大布施	1頭、13、V、1973	山下 晶
杉峠	2頭、30、V、1971	水野弘造
比叡山	1頭、5、VI、1955	塚本珪一
岩倉	3頭、10、V、1983	細川浩司

芹生	3頭、1、V、1958	岸井 尚
貴船	1頭、12、VII、1950	岸井 尚
八瀬	2頭、30、V、1984	芦田 久

C. *Melandrya* 中随一の美麗種である。分布記録の広範囲な普通種である。他のナガクチキが一般に暗所を好み夜行性であるのと対照的に、本種は陽光中を好んで飛翔するので目につき易いということもよく採集される原因であろう。

33. *Melandrya modesta* Lewis ミゾバネナガクチキ

= *M. quadricostata* Hayashi ヨツスジナガクチキ

- A. 大悲山(5)、芦生(8、9)
B. 芦生 1頭、15、VI、1975 水野弘造

C. 本種も分布が広くて個体数の少い種の一つである。*M. quadricostata* は *M. modesta* と比較して記載されたものであるが、林博士が *modesta* と見なした標本はオオナガクチキ *niponica* の小型個体かそれに近似の別種で、*quadricostata* が眞の *modesta* そのものであろうと推測される(12)。残念ながら林博士のナガクチキ標本は、虫害のため失われた由で直接的な確認が不可能になってしまった。

34. *Oosphya orientalis* Lewis アオオビナガクチキ

- A. 貴船(3)、芦生(8)
B. 芦生 1頭、15、VII、1973 水野弘造 大悲山 1頭、4、VII、1971 水野弘造
杉峠 1頭、27、VI、1980 細川浩司

C. 本種は花上で採集され典型的なナガクチキとは趣きの異なる種であり、ナガクチキムシ科から除外する扱いもあるという。屋久島では春期多数採れるが本州では夏期に出現する。

35. *Scotodes niponicus* Lewis クビカクシナガクチキ

- A. 芦生(8)
B. 芦生 2頭、29、IV、1979 水野弘造 大悲山 2頭、7、V、1972 水野弘造
花脊 1頭、1、VI、1969 水野弘造 芹生 1頭、18、V、1957 岸井 尚
貴船 1頭、17、V、1957 久野英二 東福寺 1頭、31、VIII、1960 中西 K.

C. 本種は現在はナガクチキムシ科から除外されクビナガムシ科に分類されているようであるが、記録だけしておきたい。

36. *Omineus humeralis* Lewis カタアカケシジョウカイモドキ

- B. 佐々里峠 1頭、5、VI、1977 沢井 稔 杉峠 1頭、13、VI、1971 水野弘造
杉峠 3頭、23、VI、1984 芦田 久

C. 本種は所属がしばしば変更された、いわば戸籍不明の奇妙な甲虫で、佐々治教授によると *Mycteroidae* という科に属する(12) そうであるが、ナガクチキムシ科に含められた時期があるので、本目録に含めて記録を残しておく。

産地はごく簡略に記したが行政区画からは次のようなになる。大略、北から南に、東から西に、配列したが部分的に前後したところがある。主要な地点を地図に番号記入した。

太鼓山①：竹野郡弥栄町／与謝郡伊根町 芹生②：北桑田郡美山町

佐々里峠③：同上／京都市左京区 芹生④：北桑田郡京北町

久多⑤、大悲山⑥、八丁平、大布施⑦、花脊・杉峠⑧、貴船⑨、鞍馬山⑩、大原⑪、八瀬・比叡山⑫、岩倉・宝ヶ池・松ヶ崎・瓜生山・北白川・大文字山⑬、：京都市左京区

祖父谷⑭、雲ヶ畑：京都市北区 東福寺：京都市東山区

醍醐山⑮、稻荷山⑯：京都市伏見区 松尾⑰：京都市右京区

大原野⑰：京都市西京区 天王山⑲：久世郡大山崎町

五雲峰⑳、天ヶ瀬㉑：宇治市 鶴峰山㉒：綴喜郡宇治田原町／相楽郡和束町

井手町㉓：綴喜郡 月ヶ瀬口㉔：相楽郡南山城村



図1 京都府内におけるナガクチキムシ科甲虫の記録地

0. 野村 鎮 (1963) ナガクチキムシ科 原色昆虫大図鑑 II 甲虫篇：240－245。
1. Champion, G. (1916) Notes on Melandryidae(3) Ent. Mon. Mag. 52 : 32－40。
2. 松村松年 (1931) ナガクチキムシ科 日本昆虫大図鑑：205－208。
3. 塚本珪一 (1956) 京都北山の昆虫 Nature Study 2 (7／8) : 14－15。
4. 岸井 尚 (1959) ナガクチキムシ2題 AKITU 8(1) : 24。
5. Hayashi, M. (1960) Studies on Melandryidae from Japan I. Ent. Rev. Japan 11(2) : 42－46。
6. Kishii, T. (1965) Fauna of Coleoptera in Arashiyama collected by T. Kishii. 嵐山国有林地区観光資源開発調査書：191－215。
7. 水野弘造・青野孝昭 (1969) 岡山・鳥取両県よりのナガクチキムシ採集記録 すずむし 18(1) : 5－7。
8. 水野弘造 (1976) 京都・芦生演習林の甲虫相(2) 月刊むし (60) : 17－18。
9. 水野弘造 (1976) 京都・芦生演習林の甲虫相(9) 月刊むし (86) : 28－29。
10. 中村俊彦 (1978) ネアカナガクチキムシを芦生で採集 月刊むし (89) : 31。
11. 京都府立大学生物研究会 (1979) 岩倉の甲虫相 Microcosm (6) : 15。
12. Sasaji, H. (1984) Contribution to the Taxonomy of the Superfamily Cucuoidea (Coleoptera) of Japan and her Adjacent Districts, II Mem. Fac. Educ. Fukui Univ. Ser. II (Nat. Sci.) 34(2) : 21－63。
13. 高橋 敏 (1985) 京都府南部の甲虫 1－54。

(〒 611 宇治市木幡熊小路19-35)

兵庫県産ナガクチキムシ科甲虫目録

Melandryidae (Coleoptera) of Hyogo Pref. Japan

水野 弘造

Kôzo MIZUNO

兵庫県産の甲虫に関する文献調査は高橋寿郎氏が詳査されて全貌がほぼ明らかにされている(20)。それをみると1世紀前の文献に始まり1981年時点で900点を越えていることから、現在約1,000点の文献数と推定される。これを漏れなく調べることは私には不可能なので、ナガクチキムシ科について兵庫県から何種が報告されているのか正確なことは分らない。今回は私の入手した範囲の文献から本科甲虫の記録を拾ってみた。一方、関西カミキリムシ談話会に参会される同好諸氏から本科甲虫の標本を検視させていただくことができ、県下より未記録かと思われる種の標本も若干確認できたので、不完全ながら兵庫県産の本科甲虫目録としてまとめた。本目録を目にされる各位には、脱落記録に気付かれた場合は御教示をお願いし、未報告種の標本をお持ちの場合は記録の発表を期待したい。

なお、本目録に使用した種名に関しては文献番号(0)を基本とし(19)を参照した。目録中のA、B、Cは次の意味である。

A：文献による既知産地（カッコ内は引用文献番号）。

B：筆者の検視した標本のデータ（採集地、頭数、採集年月日、採集者名）

C：註記。

兵庫県産ナガクチキムシ科甲虫目録

1. *Synchroa melanotoides* Lewis ヒメコメツキガタナガクチキ

A. 氷ノ山(7)、川西市横地、笛部(14、16)、猪名川町木間生(14、16)

B. 高代寺山 1頭、23、VII、1975 山下 晶 花析山 1頭、10、VII、1983 大平広士

Synstrophus macrophthalmus (Reitter) カツオガタナガクチキ

A. 氷ノ山(7)、氷上郡(3)、笛部(14、16)

- B. 余部岬 1頭、5、IV、1973 大平広士 坂ノ谷 1頭、23、IV、1982 大平広士
太山寺 1頭、23、VI、1982 田中正浩
3. *Holostrophus lewisi* Csiki ヨツボシヒメナガクチキ
A. 氷ノ山(7)、川西市(15、16)
- B. 扇ノ山 3頭、14、VII、1984 谷角素彦 塩尾寺 1頭、20、VI、1976 岩田隆太郎
裏六甲山 1頭、14、VII、1971 山下晶 道場 2頭、9、VI、1984 西田信夫
4. *Holostrophus orientalis* Lewis アヤモンヒメナガクチキ
A. 妙高山(3)
- B. 氷ノ山 2頭、7、VII、1973 大平広士
- C. 前種よりも個体数が少く分布もやや局所的となる。
5. *Holostrophus morimotoi* Sasaji ニセアヤモンヒメナガクチキ
A. 扇ノ山(9)
- C. 本種は九州では各地で記録されているが、本州では稀のようである。
6. *Hallomenus tokejii* Nomura et Kato トケジヒメナガクチキ
A. 氷ノ山(8)
- C. 本種は分布が局所的で全国的にも記録が少い。クリの枯枝に見られるという。
7. *Orchesia ocularis* Lewis カバイロニセハナノミ
A. 扇ノ山(5、6、7)、氷ノ山(7)、川西市笹部(14、16)
- B. 扇ノ山 1頭、15、IX、1984 谷角素彦 氷ノ山 1頭、21、VI、1984 有本久之
赤西 1頭、22、VI、1983 大平広士 笹部 1頭、29、V、1982 山下晶
8. *Orchesia imitans* Lewis アカオビニセハナノミ
A. 扇ノ山(5、6、7)、氷ノ山(7)、川西市笹部(16)、猪名川町木間生(16)
- B. 赤西 1頭、12、VI、1983 有本久之 笹部 1頭、19、V、1979 望月寛人
道場 4頭、2、VI、1984 西田信夫
9. *Orchesia diversenotata* Pic マルモンニセハナノミ
A. 川西市笹部(14)
- B. 氷ノ山坂ノ谷 15頭、(1984年11月採取の樹種不明の材より羽化) 5月上旬~6月中旬、
1985 西田信夫
- C. (14)の記録は(16)には再録されていないので誤同定として削除されたのかもしれない。
10. *Orchesia elegantula* Lewis アヤモンニセハナノミ
A. 川西市笹部(16)
- B. 赤西 1頭、23、VI、1984 平野雅親
11. *Serropalpus niponicus* Lewis キイロホソナガクチキ
A. 氷ノ山(7)、水上郡(3)、川西市笹部(14、16)
- B. 引原ダム 1頭、5、IX、1982 大平広士
12. *Serropalpus filiformis* Marseul ヒメホソナガクチキ
B. 宝塚市 1頭、7、VI、1971 山下晶 川西市 1頭、9、VII、1980 山下晶
- C. 前種よりも高標高地に分布する傾向があるため、普通種ではあるが西日本では産地が局所的にな

る。

13. *Dapsiloderus nomurai* (Nakane et Hayashi) ヒイロホソナガクチキ
 - A. 扇ノ山 (5、6、7)
 - B. 扇ノ山 1頭、14、VII、1984 足立義弘
 - C. 本種は大型美麗種の1つで、分布も局所的な稀種である。
14. *Mikadonius gracilis* Lewis キスジナガクチキ
 - A. 扇ノ山 (5、6、7)、氷ノ山 (11)、三室山 (7)
 - B. 扇ノ山 1頭、14、VII、1984 谷角素彦 音水 2頭、22、VI、1982 大平広士
15. *Stenoxylita trialbofasciata* (Hayashi et Kato) ミスジナガクチキ
 - B. 赤西 (ケヤキより) 1頭、8、VI、1985 和田洋介
16. *Anisoxya ocularis* Nomura et Kato オオメヅカクシナガクチキ (新称)
 - A. 川西市笹部 (14)
 - C. (14) の記録は同著者による。(16)には再録されていないので、誤同定として削除されたのかかもしれない。
17. *Dircaeomorpha validicornis* (Lewis) ムツモンナガクチキ
 - A. 扇ノ山 (2、5、6、7)、氷ノ山 (12)
 - B. 扇ノ山 3頭、14、VII、1984 谷角素彦 氷ノ山 1頭、15、VII、1973 横山 創
18. *Dircea erotyloides* Lewis フタオビホソナガクチキ
 - A. 氷ノ山 (7、19)
 - B. 扇ノ山 1頭、14、VII、1984 谷角素彦
氷ノ山坂ノ谷 (1984年11月採取の樹種不明の材より羽化) 6月中旬 1985 西田信夫
赤西 (エゾエノキ材より羽化) 12、VIII、1985 北山 昭
19. *Dircea dentatomaculata* Lewis ハガタホソナガクチキ
 - B. 氷ノ山坂ノ谷 8頭、(1984年11月採取の樹種不明の材より羽化) 4月上～中旬、1985 西田信夫
20. *Phloeotrya flavitarsis* (Lewis) キオビホソナガクチキ
 - A. 扇ノ山 (2、5、6)
 - B. 扇ノ山 1頭、2、VI、1984 谷角素彦 音水 1頭、3、VI、1979 山下 晶
音水 1頭、8、V、1983 北山健司 赤西 2頭、8、V、1983 加藤敦史
21. *Phloeotrya rugicollis* Marseul クロホソナガクチキ
 - A. 扇ノ山 (11)、氷ノ山 (7)、川西市笹部、横地 (14、16)、摩耶山 (1)
 - B. 扇ノ山 1頭、5、VIII、1984 岩田隆太郎 高代寺山 2頭、5、VI、1982 山下 晶
22. *Phloeotrya obscura* (Lewis) ビロウドホソナガクチキ
 - A. 扇ノ山 (5、6、7)、氷ノ山 (7)、猪名川町木間生 (14、16)、川西市笹部 (14、16)
 - B. 扇ノ山 3頭、30、VI、1984 谷角素彦 坂ノ谷 1頭、30、V、1982 大平広士
赤西 1頭、23、V、1976 八木正道 笹部 3頭、19、V、1979 望月寛人
道場 1頭、9、VI、1984 西田信夫
23. *Phloeotrya femoralis* (Lewis) モモキホソナガクチキ

- A. 三室山 (7)
- B. 赤西 1頭、23、V、1976 八木正道 赤西 1頭、1、VI、1985 平野雅親
- C. 本種は材からは多数羽化するが、野外では稀にしか採集されないので天敵に攻撃される率が高いものと思われる。
24. *Phloeotrya bellicosa* Lewis オオクロホソナガクチキ
- A. 扇ノ山 (5、6、7)、川西市笹部 (14)
- B. 扇ノ山 1頭、10、VII、1972 横山 創
- C. 笹部の記録は同著者による (16) には再録されていないので誤同定として削除されたのかもしれない。
25. *Phloeotrya?* sp. クロチビヒラタホソナガクチキ (仮称)
- B. 赤西 1頭、8、V、1982 大平広士 笹部 1頭、16、V、1976 仲田元亮
木間生 1頭、22、V、1982 山下 晶
- C. 本種は未記載種と思われるが、西日本の低山地帯には広く分布するものようである。
26. *Pseudozilora quadrimaculata* Nomura ヨツモンヒメホソナガクチキ
- B. 槻並中 1頭、3、V、1979 仲田元亮
- C. 全国的に記録が少いが、ケシキスイ科に含まれる種として誤認されているため未発表になっている場合が多いのではないかと思われる。
27. *Nipponomarolia kobensis* Miyatake コウベハネナシナガクチキ
- A. 神戸市白川台 (模式産地: 18)
- B. Paratype. 1♀、神戸市白川台 26、I、1979 M. Nagai
- C. 本種は樹皮下で成虫越冬し、しかも後翅が退化した特殊な生態の甲虫ということで最近記載されるまでほとんどその存在が知られていなかった。
28. *Microtonus dimidiatus* Marseul フタモンヒメナガクチキ
- B. 布引 1頭、17、V、1959 芝田太一
29. *Syphora ater* Nomura ヒメナガクチキ
- B. 扇ノ山 1頭、14、VII、1984 谷角素彦 氷ノ山 1頭、25、VI、1983 山地 治
- C. 上記標本は他産地のものに較べ前胸背が赤褐色味を帶びており正確に本種であるか否か今後の研究を要するが、一応本種名を当てておいた。
30. *Syphora miyakei miyakei* Nomura et Hayashi ミヤケヒメナガクチキ
- A. 三川山 (13)
- B. 氷ノ山 1頭、17、VII、1983 山地 治
31. *Stolius vagepictus* Lewis ヨツボシキバネナガクチキ
- A. 氷ノ山
32. *Phryganophilus ruficollis rosti* Hubenthal ムネアカナガクチキ
- A. 扇ノ山 (2、6、7)、粟鹿峰 (4)
33. *Ivania coccinea* Lewis セアカナガクチキ
- A. 扇ノ山 (10)、三室山 (7)
- B. 氷ノ山坂ノ谷 1頭、28、V、1977 山地 治

34. *Bonzicus hypocrita* Lewis ポウズナガクチキ

- A. 氷ノ山(7)、三室山(7)
 B. 坂ノ谷 1頭、22、VI、1980 大平広士 赤西 1頭、20、V、1979 八木正道

35. *Prothalpia pictipennis* (Lewis) イツモンナガクチキ

- A. 扇ノ山(10)
 B. 扇ノ山 1頭、1、VII、1984 谷角素彦 氷ノ山 1頭、25、VI、1983 山地 治
 C. 本種は西日本では稀であり、産地も局所的である。

36. *Prothalpia rufonotata* (Nomura) アカモンナガクチキ

- B. 扇ノ山 1頭、30、VI、1984 谷角素彦
 赤西 2頭、(1984年11月採取のミズナラ材より羽化) 25、III、1985 岡田裕之
 C. 前種と同様に稀で産地も局所的である。

37. *Prothalpia ordinaria* (Lewis) ヘリアカナガクチキ

- A. 扇ノ山(5、6、7)
 B. 赤西 1頭、20、V、1979 八木正道 赤西 1頭、23、VI、1984 平野雅親

38. *Melandrya gloriosa* Lewis アオバナガクチキ

- A. 竹野町三原(10)、氷ノ山(7)、三室山(7)、氷土郡神楽(3)、
 猪名川町楓並中(16)、川西市笹部(14、16)
 B. 扇ノ山 1頭、1、VII、1984 谷角素彦 氷ノ山横行 1頭、24、VI、1984 平野雅親
 赤西 1頭、20、V、1979 八木正道 高代寺山 2頭、5、V、1973 山下 星
 三尊山 1頭、22、V、1983 安井行雄 川西市笹部 1頭、8、V、1983 中田隆昭

39. *Melandrya niponica* Lewis オオナガクチキ

- A. 扇ノ山(6、7)
 B. 扇ノ山 1頭、2、VI、1974 横山 創
 C. ブナなどの立枯れに見られるが、西日本ではあまり多くない。

40. *Melandrya modesta* Lewis ミゾバネナガクチキ = *M. quadricostata* Hayashi

- A. 扇ノ山(5*、6*、7*、10)
 B. 扇ノ山 1頭、30、VI、1984 足立義弘
 C. ※、(5)(6)(7)には*M. modesta*と、*M. quadricostata*の2種を扇ノ山より報じているが、
*quadricosta*と同定されたものが本種ミゾバネナガクチキで、*modesta*と同定されたものはオオナ
 ガクチキの小型のものではないかと推定する。

41. *Melandrya quadrisignata* Nakane et Hayashi ヨツモンナガクチキ

- B. 扇ノ山 1頭、30、VI、1984 谷角素彦 坂ノ谷 1頭、12、V、1983 大平広士
 赤西 4頭、(1984年11月採取のミズナラ材より羽化) 30、III、1984 岡田裕之
 C. ブナ帯に見られ、多いものではない。

42. *Oosphia orientalis* (Lewis) アオオビナガクチキ

- A. 扇ノ山(5、6、10)、鉢伏山(10)、水谷(17)
 B. 鉢伏山 13頭、1、VIII、1974 稲田健一 鉢伏山 2頭、10、VII、1983 加野 正

産地はごく簡略に記したのでその位置を地図上に数字でプロットした。目印となる主要都市をアルファベットで示した。

- ①余部岬 ②三川山 ③竹野町三原 ④扇ノ山 ⑤鉢伏山 ⑥氷ノ山 ⑦横行谷 ⑧坂ノ谷・戸倉
- ⑨音水・引原ダム ⑩三室山・赤西 ⑪波賀町水谷 ⑫粟鹿峰 ⑬妙高山 ⑭三草山 ⑮妙見山
- ⑯高代寺山 ⑰川西市笹部 ⑱神戸市道場 ⑲六甲山 ⑳摩耶山 ㉑神戸市白川台

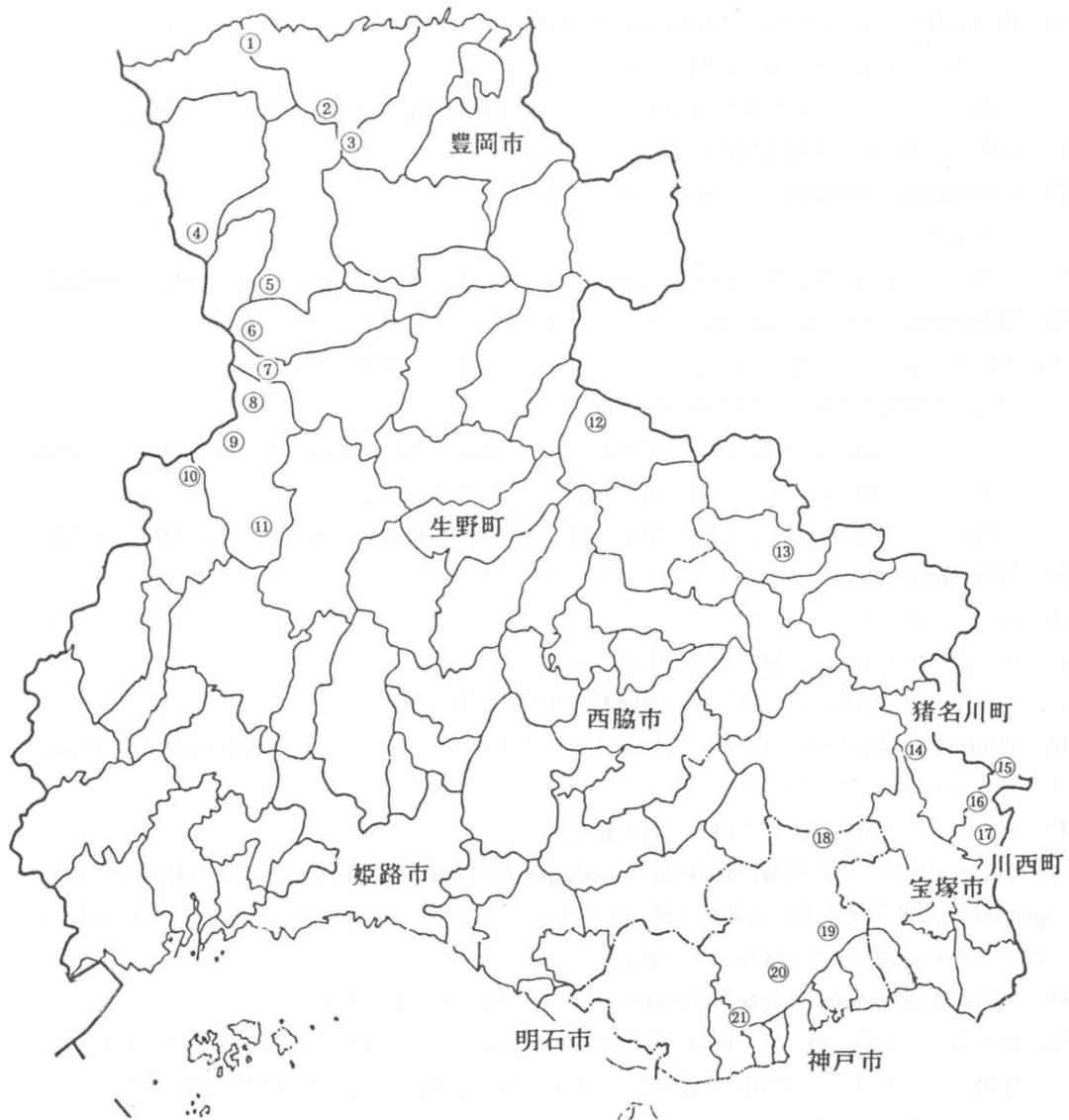


図1 兵庫県内におけるナガクチキムシ科甲虫の記録地

引用文献

0. 野村 鎮 (1963) ナガクチキムシ科 原色昆虫大図鑑 II 甲虫篇 240-245. (北隆館)
1. Lewis, G. (1895) On the Cistelidae and other Heteromerous Species of Japan. Ann. Mag. nat. Hist. (6)15 : 250-278, 422-448.
2. 奥谷禎一 (1955) 但馬の好採集地 新昆虫 8(5) : 16-20.
3. 山本義丸 (1958) 鞘翅目 兵庫県氷上郡昆虫目録 NATURA (特別号) : 72-102.
4. 高橋 匡 (1960) 氷上郡昆虫目録追加 (第1報) NATURA (17) : 100-105.
5. 辻 啓介 (1963) 但馬扇ノ山甲虫目録 (I) 兵庫農大生物研究部々誌(3) : 24-47.
6. 辻 啓介、岸田剛二 (1972) 但馬扇ノ山の甲虫目録 兵庫県自然保護協会調査資料(1) 扇ノ山周辺の動物 (I) : 20-47.
7. 奥谷禎一、高橋寿郎 (1974) 中国山脈東端の昆虫相・昆虫目録 東中国山地自然環境調査報告 : 173-231.
8. Sasaji, H. (1974) Notes on the Japanese Melandryidae, with Descriptions of New Species. (Coleoptera) Mem. Edn. Fukui Univ. Ser. II (Nat. Sci.) (24) : 1-14.
9. 中根猛彦 (1975) 九州に分布する異節群甲虫 国立科博専報(8) : 161-172.
10. 高橋 匡 (1975) ナガクチキムシ科 豊岡高等学校昆虫標本目録 (第1・2報) : 18, 58.
11. 高橋 匠 (1975) ナガクチキムシ科 同誌 (第3報) : 20.
12. 高橋 匠 (1976) ナガクチキムシ科 同誌 (第4報) : 10.
13. 高橋 匠 (1978) ナガクチキムシ科 同誌 (第5報) : 12.
14. 仲田元亮 (1978) ナガクチキムシ科 能勢の昆虫 : 221-223.
15. 仲田元亮 (1979) 「能勢の昆虫」 その後(2) きべりはむし 7(2) : 16-28.
16. 仲田元亮 (1982) ナガクチキムシ科 能勢の昆虫 (増補) 甲虫の部下巻 : 134-139.
17. 高橋寿郎 (1982) 宍粟郡波賀町水谷の甲虫 きべりはむし 10(1) : 37-41.
18. Miyatake, M. (1982) A New Genus and Two New Species of the Tribe Hypulini from Japan (Coleoptera: Melandryidae) Trans. Shikoku Ent. Soc. 16(1/2) : 29-35.
19. Sasaji, H. (1984) Contribution to the Taxonomy of the Superfamily Cucujoidea (Coleoptera) of Japan and her Adjacent Districts, II Mem. Edn. Fukui Univ. II (Nat. Sci.) 34(2) : 21-63.
20. 高橋寿郎 (1981) 兵庫県産甲虫類に関する文献目録 改訂版 pp 1-42.

(〒 611 宇治市木幡熊小路19-35)

一 会務のご案内一

- ・会費はなるべく下記の郵便振替口座宛にお振り込み下さい。現金書留等に比べて送金の費用がはるかに安くなります。

「東京 0-147871、日本鞘翅目学会」

郵便振替の送金に関しては、原則として領収書は発行いたしませんので、送金時にお手元に残る控えを保管下さい。領収書を発行する手間は大変なので、会務の軽減化のために'84年度末から郵便振替口座を作りました。ご協力いただければ幸いです。なお、現金書留・定額小為替による送金については、領収書を発行いたします。

- ・会費は前納制になっていますので、お早目にお納め下さい。

毎年、後半にお送りする会誌と一緒に翌年度分の会費納入状況をお知らせしています。会費が前納されない場合でも、次の年の前半の会誌は発送いたしますが、その折にお知らせする会費請求においてもさらに送金のない場合は、後半の会誌から発送を打ち切らせていただきます。また、会費が切れて2年たちますと、このままでは認定退会の扱いとなる旨のおハガキを出しています。認定退会になった場合、その後新たに入会される場合は会費の他に入会金が必要となります。

- ・会誌のバックナンバーはすべて「TTS昆虫図書」で扱っています。'80年度より完全に委託しており、事務局等では一切受け付けておりませんので、必ずTTS昆虫図書の方へお申し込み下さい。

TTS昆虫図書 〒214 川崎市多摩区登戸新町14

TEL 044-911-8511 郵便振替：東京 0-73156

「ELYTRA」Vol. 1 №.1, Vol. 2 №.1 & 2 (1973~74年)	3 冊組¥2,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 3 Nos.1/2 「さやばね」№.1 (1975年)	2 冊組¥2,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 4 №.1 & 2 「さやばね」№.2 (1976年)	3 冊組¥2,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 5 №.1 & 2 「さやばね」№.3 (1977年)	3 冊組¥3,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 6 №.1 & 2 「さやばね」№.4 (1978年)	3 冊組¥3,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 7 №.1 & 2 「さやばね」№.5 (1979~80年)	3 冊組¥3,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 8 №.1 & 2 「さやばね」№.6 (1980~81年)	3 冊組¥3,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 9 №.1 & 2 「さやばね」№.7 (1981年)	3 冊組¥3,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 10 №.1 & 2 「さやばね」№.8 (1982年)	3 冊組¥3,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 11 Nos.1/2 「さやばね」№.9 (1983年)	2 冊組¥3,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 12 №.1 & 2 「さやばね」№.10 (1984年)	3 冊組¥3,000 (〒200)
「ELYTRA」Vol. 13 №.1 & 2, 会員名簿 (1985年)	3 冊組¥3,000 (〒200)

Pdonia の地域変異 II 対馬 (大陸と日本との陸橋の島に棲む *Pidonia* 類)

齊藤秀生・齊藤明子



図1 調査地域位置図

対馬は九州と韓国の中間に位置し、長さ75km、幅12~18km、南北に細長く総面積670km²、我が国で第10位の広さを持つ島である(図1参照)。

北端の韓崎から韓国の釜山までは60km足らず、南端の神崎から壱岐の勝本まで約50km、九州本土で最も近い佐賀県鎮西町までは80km以上の距離があり、九州本土よりはやや韓国に近い位置にある。

したがって、対馬は多くの動植物の分布において大陸と日本の地史的な陸橋となった地域として、注目されている。

カミキリムシ類においても、キモンハナカミキリ *Leptura duodecimguttata*, カンボウホソトラカミキリ *Hayashiclytus acutivittis*, クスベニカミキリ *Pyrestes haematicus*, モンクロベニカミキリ *Purpuricenus lituratus*などのように、大陸から対馬を経由して日本に侵入したと考えられる周日本海系要素の分布型を有する種にとって、対馬の位置付けは重要である。

Pidonia 類の多くは、このように対馬が陸橋であった時代に大陸から日本へ侵入したと考えられているが、現状で大陸と日本との共通種が、〔 *Signifera* ナガバヒメハナカミキリ、*maculithorax* カク

※) *Pidonia* の地域変異 I さやばね (10) : 1~17。

ムネヒメハナカミキリの2種の疑問種を含めても、3種しか知られていない。また、対馬では現在4種が分布しているのみである。] などから、現在分布している日本の *Pidonia* 類のほとんどは、最終氷期より前の時代にすでに對馬を経由して侵入していたものと考えられている。

今回は九州と韓国との間に位置する對馬に生息する種について調査した結果を発表する。

各調査地の位置

北五郎林道：かみあがた みね 上県郡峰町から上県町へ向かう国道383号線の両町境付近から東へ延びる林道で、おお
ほし 星山347mと高野山351mの間をほぼ東西に流れる沢沿いに位置する。

なお、白水・宮田（1976）、内野（1977）、入江（1982）、草間ほか（1984）などに記録されている大星山採集記録地はすべてこの北五郎林道である。

鳴呼難儀坂：あ あ な ぎ ざ か し も あ が た い づ は ら つ つ 下県郡の厳原から豆駿へ向かう道路沿いで、堀田のやや南部に位置する蛇行した登り坂である。

三根：峰町の中心部に位置する集落。 鶴知：美津島町対馬空港の西南部に位置する集落。

有明山周辺：厳原町の中心部の西部に位置する558mの山。

これらの位置は図1に示した。

○生息種

生息が確認された種は4種でそれらの内容は表1に示した。

Signifera ナガバヒメハナカミキリ以外の3種は従来から当地に分布の確認されているものである。

対馬の *signifera* は、林（1968）で初めて分布が報告され、それを受け、草間（1973）、足立（1974）、中根（1975）がそれぞれ分布を認めており、記録地は鹿見口であった。その後、白水・宮田（前述）などでは、対馬の本種はすべて *gibbicollis* ミスジヒメハナカミキリであるとし、林（1980）以外では、対馬には *signifera* は分布しないとされ、草間ほか（前述）では、対馬の分布を欠いている。

これに対し今坂（1985）は、御岳および大星山（北五郎林道）の各1雄個体に基づき、対馬に *signifera* と *gibbicollis* がそれぞれ分布することを報じている。

詳細な見解については後に述べるが、今回の調査では表1のように確認されている。

また他の種については、*puziloi* フタオビチビハナカミキリ、*aegrota* チャイロヒメハナカミキリは

表1 対馬で確認された *Pidonia*

確認年月 県 市町村 地名 標高 メッシュ番号	1985年5月 42 峰町一上県町 北五郎林道 40-200m 5129-52-88-89-99	1985年5月 42 厳原町 鳴呼難儀坂 120-180m 5129-22-02	1985年5月 42 峰町 三根 10-20m 5129-52-65	1985年5月 42 厳原町 稚現山 220-360m 5129-22-82	1985年5月 42 厳原町 久田道 100m 5129-22-32	1985年5月 42 英津島町 鶴知 10m 5129-31-25
<i>aegrota</i>	20日 21日 22日 23日 52♂ 75♂ 19♂ 64♂ 38♀ 26♀ 15♀ 31♀	23日 24日 63♂ 36♂ 41♀ 21♀	19日 2♂ 1♀	24日 1♀ 1♀	24日 1♂ 1♀	24日 1♂ 3♀
<i>puziloi</i>	20日 21日 22日 23日 31♂ 217♂ 74♂ 128♂ 14♀ 56♀ 58♀ 75♀	23日 24日 43♂ 21♂ 21♀ 13♀	19日 3♂ 1♀	24日 6♂ 6♀		
<i>gibbicollis</i>	21日 22日 1♂ 2♂ 1♀ 1♀	23日 24日 1♀ 1♀				
<i>signifera</i>	20日 21日 22日 23日 3♂ 8♂ 7♂ 1♀ 2♀ 9♀ 3♀	23日 1♀		24日 2♀		

個体数が多く極く普通に見られたが、*gibbicollis* は極めて少なかった。

○各種の内容と変異

1、*aegrota kubokii* チャイロヒメハナカミキリ対馬亜種

本亜種は、従来 *aegrota* Bates, 1884 (日本産) が、*debilis* Kraatz, 1879 (Amur 産) の synonym とされていたものを、窪木 (1982) がそれぞれ別種であるとした際に、さらに本州・四国・九州産の *aegrota* と異なる形態をしているとして対馬産のものを *spectabilis* と命名し亜種と認めたものである。しかし林 (1984) は、本亜種名 *spectabilis* はすでに Kraatz によって先占されているため、亜種名を *kubokii* とした。

Aegrota は *Pidonia* 類の中でも変異が少なく、全国的に比較的安定した表現型を示す種である。対馬の個体群は雄の体形がやや細長く、すべての個体の腹部第 1 ~ 2 節が黒色である。また窪木(前述)で示しているように雌雄とも上翅会合線の黒色が顕著である。しかし、この傾向は生時には顕著であるが死んだ後時に経過すると不明瞭となる。

また、本亜種の記載時に図示された雄交尾器の Lateral lobes の形態では、原名亜種の *paramera* はより太短く、対馬亜種では細長くなっているが、多数の個体を検すると、このような違いは認められず、雄交尾器の *paramera* の形態ではこの両亜種を区別することはできなかった。

2、*puziloi* フタオビチビハナカミキリ

本種は典型的な周日本海系要素を示す分布型を持っており、アムール (原産地) から韓国・対馬・九州・四国・本州・北海道南部に分布する。対馬の個体群も他地域と同様で、特に当地での顕著な地域変異は認められなかった。各個体中には、上翅会合部分や肩部が黄褐色となり、全体が明るくなる個体から、通常の茶褐色の上翅に白色の弓状紋を 2 対有する個体まで現われる。

3、*gibbicollis* ミスジヒメハナカミキリ

本種は国内では対馬のみに分布する種であるが、次種と混合されていたため、本種の本来の特徴が明白になっていなかった。

本種は次種に比べて、体の幅が広く一般に大型であり、図 2 に示したように雌雄とも上翅の Lp 紋は S 紋と連絡しない。しかし互いに酷似する個体も現われるので、正確に同定するには雌雄の交尾器の形態差を調べることが最適である。

なお、対馬において両種を区別するめやすとなる外見上の相異については、簡単に表 2 としてまとめて示した。

4、*signifera* ナガバヒメハナカミキリ

対馬の本種は、雌雄とも触角が短かく、雄では上翅の Lp 紋が S 紋に連絡する傾向が見られないことなどにより、本州・四国・九州の個体群より、前種に酷似している。そのため今日まで前種として同定されていたようである。

今坂 (前述) は雄の腹板の色彩について述べているが、今回検した個体では全体が黒色の個体が最も多く、次いで第 5 節のみが赤褐色の個体、第 3 ~ 5 節が赤褐色の個体と変異が見られた。また、胸部についても黒色の個体から赤褐色部の広がる個体まで見られた。

雌の腹板の色彩も同様に変異が見られ、全体が黒色で第 1 ~ 4 節の後縁のみが黄褐色となる個体、全体が黄褐色になる個体、さらには両者の中間的な個体までの個体変異があった。

図3に示したように、上翅の斑紋変異は比較的少なく、雄ではLb・Lm・Lp紋が僅かに離れる個体から、それぞれ連絡する個体、さらにはB紋まで連絡する個体まで現われるが、これらの黒色斑紋が最も発達する個体でもLp紋が横へ広がりS紋と連絡するような傾向は見られなかった。雌では、基本的に本州などの個体群との斑紋の発達傾向に相異は認められなかったが、斑紋の発達の悪い個体では雄同様Lp紋がS紋に連絡する傾向が見られない。

◦生態に関する考察

本調査を実施した5月下旬の対馬における主な訪花植物は、マルバウツギ *Deutzia scabra* Thunberg・シャク *Anthriscus sylvestris* (L.) Hoffm. subsp. *aemula* (Woron.) Kitam. およびコハツガマズミ *Viburnum erosum* Thunbergであった。これらの3種のうち、最も多く見られる植物はマルバウツギで、ほぼ全島に普通であった。シャクは北五郎林道の沢沿いに見られ、コハツガマズミは同地および有明山周辺などで開花が見られたが、個体数は少なかった。

Pidonia 類の訪花が最も多く見られたものはマルバウツギであったが、これは本種の株数が多いいため、訪花条件の悪い所などでは全く訪花が見られない株も多く、全体では訪花していない株の方が多かった。これに対し、シャク・コハツガマズミでは、開花している株数は少ないが、*Pidonia* 類の訪花はよく見られた。

マルバウツギは、*puziloi* および *aegrota* の訪花が多く、*gibbicollis* は鳴呼難儀坂で1雌が、*signifera* も弱干数の訪花が見られた。また北五郎林道では、シャクにこれら4種の訪花が見られ、特に *signifera* および *gibbicollis* の訪花割合が多かった。コハツガマズミでは少ないながら4種すべての訪花が

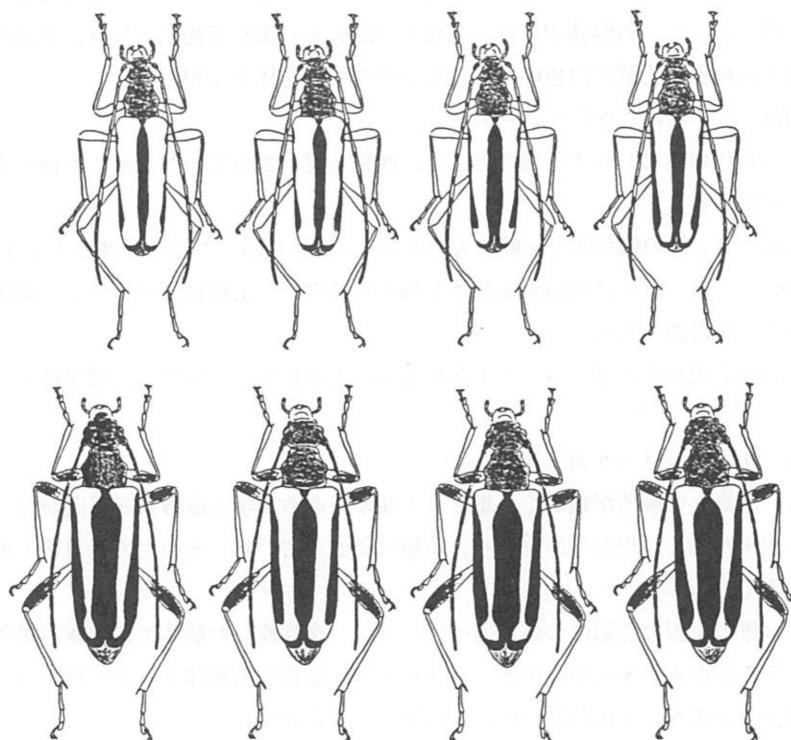
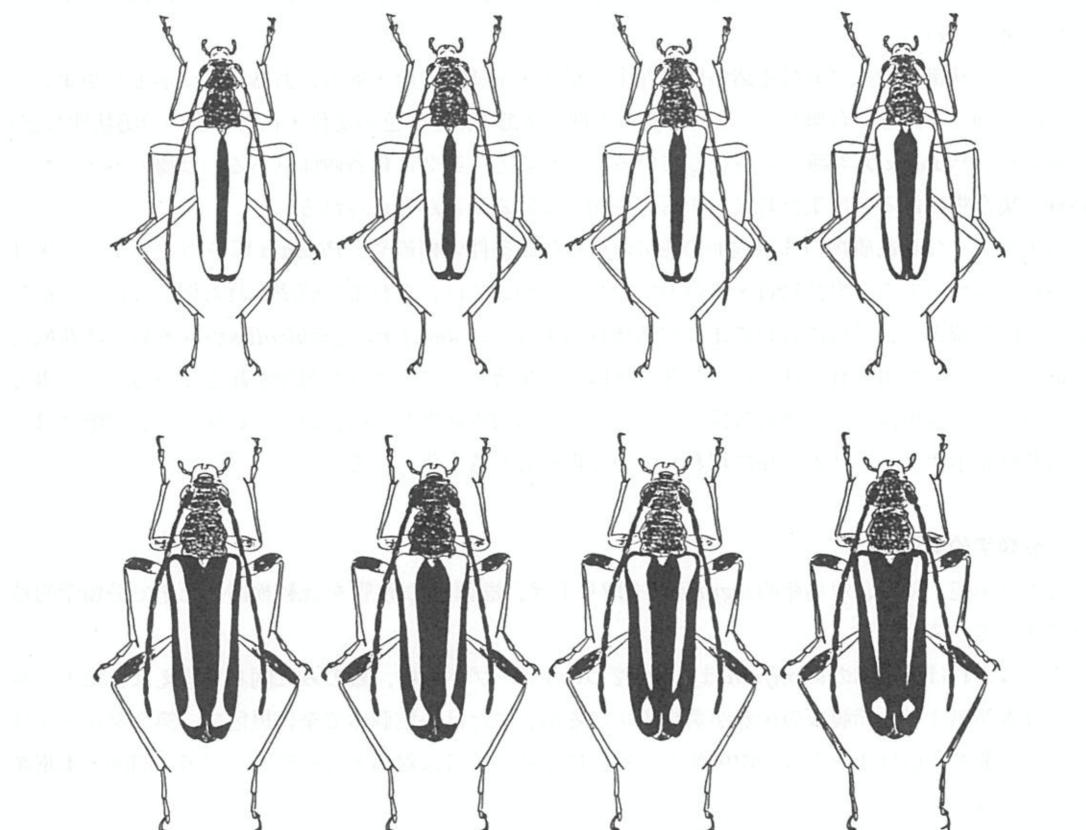


図2 対馬産の *P. gibbicollis* の上翅斑紋変異

上段：雄、下段：雌

表2 *P. gibbicollis* と *signifera* の区別のめやすとなる外見上の相異

形質 種名 (調査標本数)	<i>gibbicollis</i> (5♂4♀)	<i>signifera</i> (41♂23♀)
小腮鬚先端節の先端部	黒色	黄褐色
触角 雄 第5節：6節	1 : 0.81 — 0.78	1 : 0.78 — 0.69
雄 第8節—10節の長さと幅	先端部が最も長く、長さ : 幅は 8節 ≈ 1 : 3.5 9節 ≈ 1 : 3.4 10節 ≈ 1 : 2.9	中央部が最も長く、長さ : 幅は 8節 ≈ 1 : 4.2 9節 ≈ 1 : 4.1 10節 ≈ 1 : 3.8
前胸背の形態	側縁中央の角ばりがより強い	側縁中央の角ばりがより弱い
小楯板	黒色	赤褐色の個体が多く、黒色のものもある
上翅 形	幅広く、上翅側縁はほぼ平行	上翅側縁は後方へ狭まる
長さと幅	♂ 上翅長の 33% < 中央幅 ♀ 上翅長の 43% < 幅	♂ 上翅長の 33% > 中央幅 ♀ 上翅長の 42% > 幅

図3 対馬産の *P. signifera* の上翅斑紋変異

上段：雄、下段：雌

見られた。

以上のように、これら3種の訪花植物に関しては、*Pidonia*各種の訪花による顕著な嗜好性は認められなかった。しかし、*signifera*および*gibbicollis*において、以下のような現象が認められた。

北五郎林道において、シャクに*signifera*および*gibbicollis*の訪花が多かったことはすでに述べたが、さらに詳細に記すとやや状況が異なっているように感じられた。

すなわち、シャクに訪花する両種は、シャクのどの株の花にもランダムに訪花しているのではなく、決まった株あるいはその株に隣接した株のみに訪花しているという現象が認められたためである。

筆者等は対馬の*Pidonia*類の中で比較的個体数の少ないこの両種を得るために、採集時に、一度採集された花を記憶し、その株の花を定期的に見回ることを行なった。恐らくこの方法を取らなければ、得られた両種の個体数は著しく減少したと思われる。北五郎林道のシャクでは、5m範囲ほどの群れた小規模な自生地の限られた株およびその周辺株において*signifera*が得られ、他のシャクでは全く得られなかった。また、林道入口付近のマルバウツギでは、調査初日に*signifera*の1雌が得られたが、その後1日おいた3日目と4日目にそれぞれ1雄が同じ株の花から得られた。なお、このマルバウツギの花は、初日時すでに満開期を過ぎていたことに加えて、林道に通う行き帰りに1回ずつ計1日2回捕虫網でゆすられていたため、3日目・4日目の雄の訪花時には、通常ではとても*Pidonia*の訪花するような花の状態ではなかった。

このような訪花植物の株レベルで*Pidonia*類の訪花が、集中する現象の解釈としては以下のようないき方柄が考えられる。

第1には株毎に微妙に異なる諸条件（花上の温度・湿度・日照・風力、あるいはつかまりやすい花の形状・向き、天敵の有無など）と花自身の生理的状態（花弁の色の変化・花粉や蜜の分泌状態など）の違いを、*Pidonia*が認識して訪花しているということ。第2には各個体（あるいは雌のみ？）が、特殊な集合物質あるいは集合音などの信号を発していることが考えられる。

以上のような訪花植物の株や個別の花毎の微妙な諸条件の相違や、*Pidonia*類を含むハナカミキリ亜科の種についての、集合物質・集合の信号などについては、これまで確認された例がない。しかし、特に今回の調査で、対馬において比較的個体数の少ない、*signifera*, *gibbicollis*が、多数の訪花植物の株の中で、極く限られた株レベルで花に選択的に集合しているような現象が起きていることは事実である。この現象は、通常簡易な採集を行なっている調査結果からは、認められないが、実際には広く訪花性を示すカミキリムシ類に現われている現象であると思われる。

○分類学的問題点

今坂（前述）では、対馬産の*signifera*を取り上げ、雄個体の形態を比較検討した上で分類学的私見を述べている。

これによれば、日本の*signifera*は大きく2つのグループがあり、雄のみに関して言えば、第1グループは腹部第3～5節腹板の後縁が黄褐色になるか、または小型個体で全体黒色で、第2グループは第3～5節あるいは4～5節の中央部が黄褐色になる。前者は対馬・九州産で、後者は四国・本州産であると言う。

筆者等が検した、本調査で得た17雄および手持ちの22雄の対馬産標本によれば、先に述べたように、今坂の指摘よりも変異の幅が広く両グループの差は明確ではなかった。しかし、腹板の黄褐色部の発

達傾向や上翅斑紋の傾向などについての基本的な指摘は、今坂の通りであった。

また、彼は交尾器のmedian lobeの形態などにより、対馬・九州産の個体群は本州・四国産の個体群と容易に区別できると述べ、何らかの分類学的処置をすべきであると記している。さらに、このような分布様式を持った亜種化は他のカミキリでは認められないと述べ、両者が別の種であると考えていることをにおわせている。

筆者等は、本種の現断階の情報に関して言えば、今坂を指示していると言える。ところが、筆者等の調査によれば、国内に産する *signifera* の個体群は少なくとも 4 つのグループに区別され、各部形態・雄交尾器等もいくぶんか異なっている。しかしながら現状において、これらの個体群に対し、すべて亜種あるいは別種として名称を与えることについては、抵抗が大きい。それは、このような現象（地域による特化傾向や初期的な亜種化など）がよく解明され理解されるためのデータが得られない状態で、結論を出すのは時期尚早であると考えているからである。

したがって、現状では *Pidonia* 類の本種のような現象をより正確に指摘し多くの問題を提起していく断階であり、このような多くの事例発表が望まれる。この意味では今坂の指摘は非常に重要である。

なお、対馬産の *signifera* 個体群の解析結果については、筆者等が原稿作製中であるため近いうちに発表したいと考えている。

次に対馬産の *gibbicollis* であるが、この個体群についても、分類学的検討を要する事柄がある。

すなわち、韓国には *gibbicollis* と同定されているものの中に 2~3 種含まれており、そのうち最も対馬産に似ているものでも、雄交尾器等に形態的相異が認められる。したがって、*gibbicollis* のタイプ（Amur 産）の再検討や、大陸に産する一連の *gibbicollis* の調査に加えて、対馬産の個体群の位置付けがなされるべきである。

交尾器の形態（図 4 参照）

1. *aegrota kubokii* : Median lobe は側面図では全体に細長く弱く湾曲し、ほぼ中央部分が狭く、median strats の融合部分はここに位置する。先端部分は背面図では先端に向って徐々に狭まる。腹部第 8 背板は角の丸い正方形かやや角ばった円形で、先端の縁は丸くやや尖出している。Paramera は顕著に二片状で、先端部がよく発達し内側に湾曲し互いに向い合った形状をしている。Spermatheca 基部のくびれは弱く、duct との区別が不明瞭である。先端部分は幅広い。また、spermatheca は体長による大きさの差はほとんど見られなかった。

なお、これらの基本的な形態において、原名亜種と区別することはできなかった。

2. *puziloi* : Median lobe は側面図では大きい個体では湾曲が強く、小さい個体では湾曲が弱い。Median strats の融合部分は、ほぼ基部 $\frac{1}{3}$ に位置する。Ventral plate は dorsal plate より顕著に伸長し、細く尖っている。先端部分は背面図では先端に向って徐々に狭まり、末端部で顕著に尖っている。Paramera は顕著な二片状で、各片は長さより幅が短い。腹部第 8 背板は、大きい個体では下低の狭い台形で幅と長さはほぼ同長、小さい個体では幅は長さより広い。先端の縁は丸く中央部でやや湾入する。

3. *signifera* : Median lobe は側面図ではほぼ一様にゆるやかに湾曲し、median strats の融合部分は基部 $\frac{1}{3}$ に位置する。先端部分は背面図では顕著に狭まり、末端部で尖っている。Lateral lobes の rink は中央部分で最も狭く、基部 $\frac{1}{3}$ で最も幅広い。Paramera は極めて不明瞭な 2 片状である。腹部

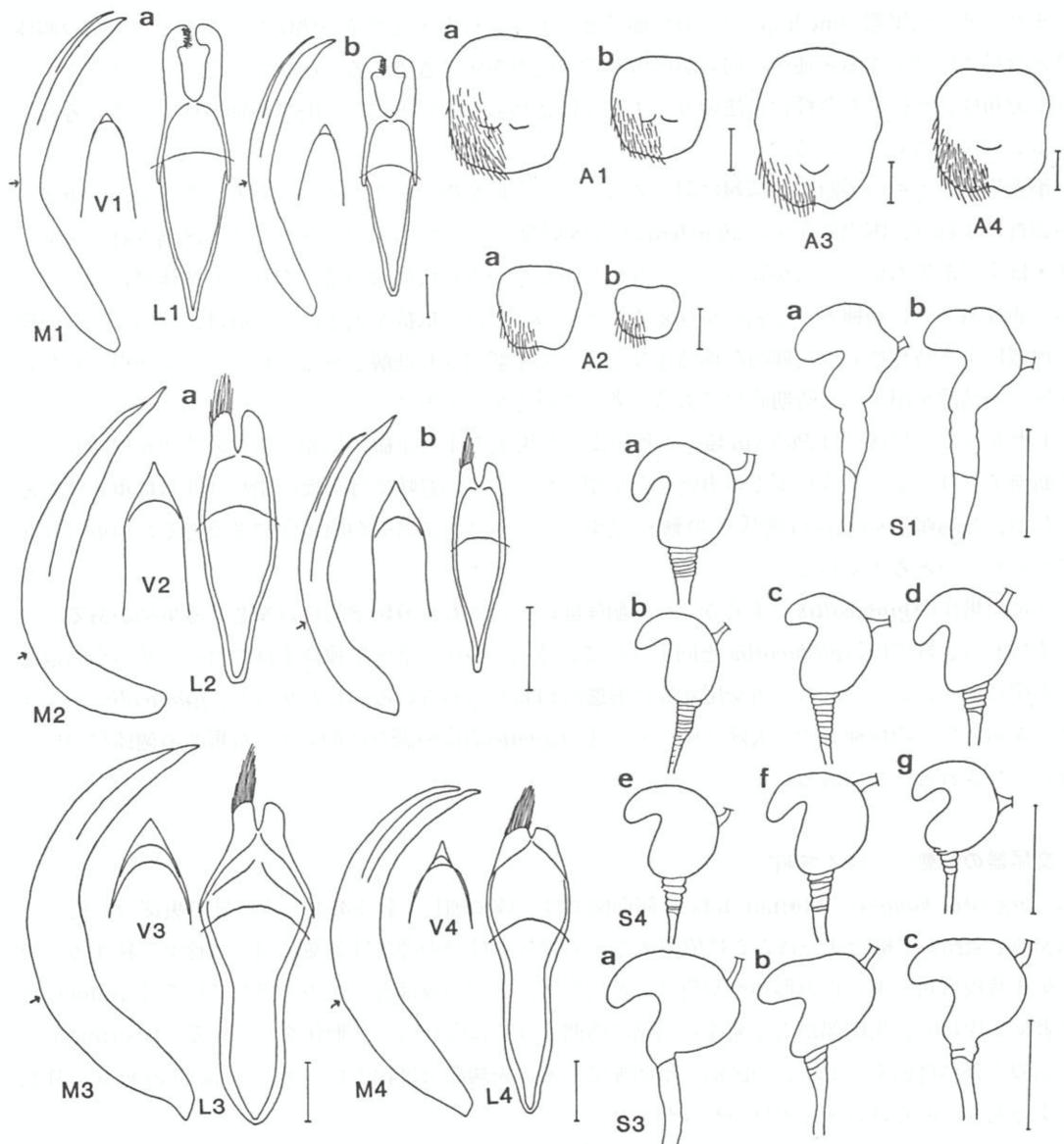


図4 対馬に生息する *Pidonia* 類の交尾器

M : median lobe (側面図). V : median lobe の先端部分 (背面図).

L : lateral lobes (側面図). A : 雄腹部第8背板 (背面図).

S : spermatheca 受精囊 (側面図). → : median struts の融合部分.

Scale : 0.25 mm.

1 : *P. aegrota* (北五郎林道) 雄 a : 8.8 mm 個体 ; (同地) 雄 b : 6.8 mm 個体 ; (同地) 雄 a : 8.8 mm 個体 ; (同地) 雄 b : 6.2 mm 個体. 2 : *P. puziloi* (同地) 雄 a : 6.2 mm 個体 ; (同地) 雄 b : 4.4 mm 個体. 3 : *P. gibbicollis* (同地) 雄 : 10.4 mm 個体 ; (鳴呼難儀坂) 雄 a : 11.6 mm 個体 ; (北五郎林道) 雄 b : 9.9 mm 個体 ; (鳴呼難儀坂) 雄 c : 11.0 mm 個体. 4 : *P. signifera* (北五郎林道) 雄 : 10.5 mm 個体 ; (同地) 雄 a : 10.8 mm 個体 ; (同地) 雄 b : 8.7 mm 個体 ; (同地) 雄 c : 8.5 mm 個体 ; (同地) 雄 d : 9.6 mm 個体 ; (同地) 雄 e : 9.6 mm 個体 ; (同地) 雄 f : 9.8 mm 個体 ; (有明山) 雄 g : 8.6 mm 個体.

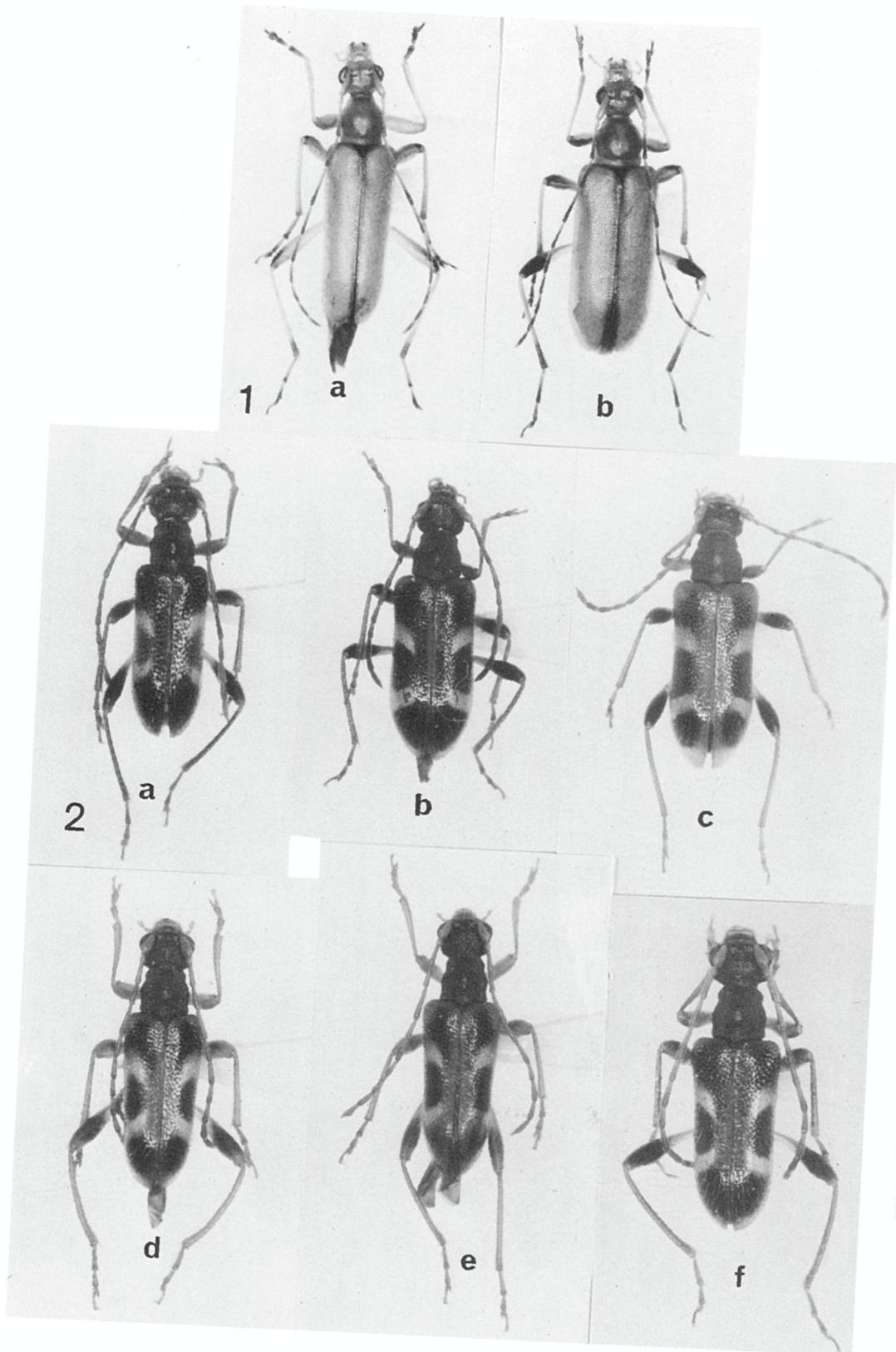


図5 対馬の *Pidonia* 1
 1 : *aegrota* ; a : 雄 ; b : 雄（北五郎林道）.
 2 : *puziloi* ; a : 雄（同地、4.5mm 個体）；b : 雄（同地、6.8mm）；c : 雄（同地、5.2mm 個体）.
 (鳴呼難儀坂、6.7mm 個体) ; d : 雄（北五郎林道、5.8mm）；e : 雄（同地、5.8mm 個体）；f : 雄（同地、5.2mm 個体）.

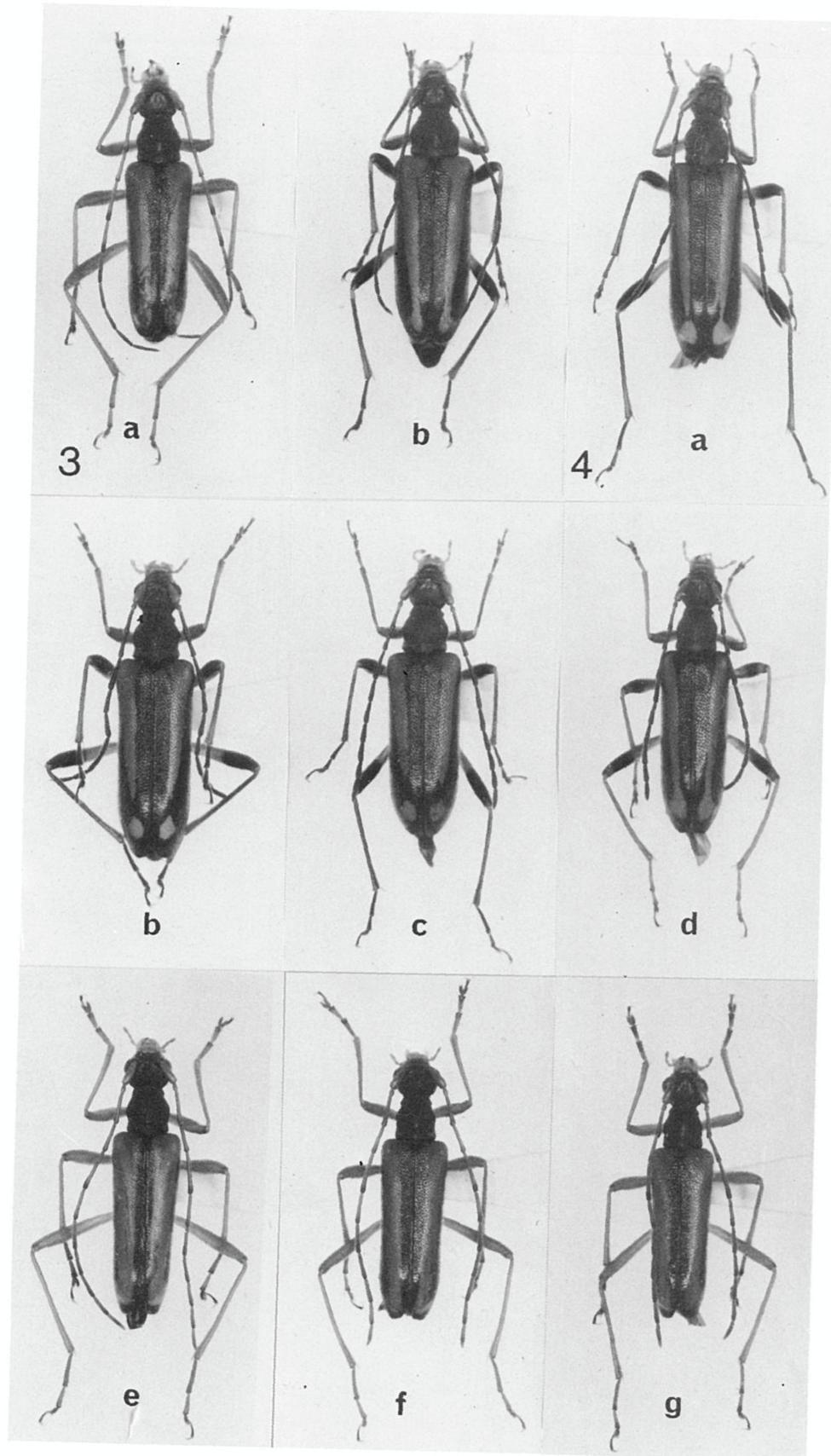


図6 対馬の *Pidonia* 2
 3 : *gibbicollis* ; a : 雄（北五郎林道、10.4mm 個体）；b : 雄（鳴呼難嶺坂、11.6mm 個体）。
 4 : *signifera* ; a : 雄（北五郎林道、9.6mm 個体）；b : 雄（同地、9.6mm 個体）；c : 雄（同地、8.7mm 個体）；d : 雄（同地、8.5mm 個体）。
 5 : *signifera* ; e : 雄（同地、8.0mm 個体）；f : 雄（同地、7.3mm 個体）。

第8背板は角の丸い正方形で、先端の縁はやや丸く、中央部で顯著に湾入する。Spermathecaの基部は幅広く、先端部分は比較的小さく幅は狭い。Ductの蛇腹部分は顯著である。

4. *gibbicollis* : Median lobeは側面図ではほぼ一様にゆるやかに湾曲し、median stratsの融合部分は基部%に位置する。先端部分は背面図では徐々に狭まる。Lateral lobesのrinkは全体の基部%で最も狭く、%で最も幅広い。parameraは顯著な2片状で、各片は幅より長さが長い。腹部第8節背板はほぼ縦に長い楕円形で、先端の縁は中央で弱く湾入する。Spermathecaの基部は小さく幅が狭い、先端部分は比較的大きく幅広い。Ductはほとんど蛇腹状になっていない。

まとめ

1. 本調査で対馬から4種の*Pidonia*が確認され、それらの主な訪花植物はマルバウツギ・シャク・コハツガマズミであった。
2. 従来*gibbicollis*として従わっていたものに*signifera*が含まれていたことが明白になり、2種を区別する形質を示した。
3. 特に*signifera*について、集中的に訪花する植物が株レベルで決まっているという現象が認められた。
4. 対馬産の*gibbicollis*および*signifera*については、分類学的問題点が認められ、両種の分布する他地域の個体群をも含めて総合的に検討し、解析することが望まれることを述べた。

図6および図7の解説

1. *aegrota kubokii*; a 雄、b 雌：雌雄とも原名亜種に比べて、上翅の会合線部分の黒味が強く現われる。また雄ではやや細長い体形をしている。
2. *puziloi*; a 雄：上翅に茶褐色部分を欠く個体、上翅全体が黒色で中央の切れた白い弓状斑紋が現われるのみ。b 雌：通常個体。茶褐色部分が肩部と会合線部分に弱干渉される。c 雌：茶褐色部分の発達した個体。茶褐色部分が発達し、肩部を被い会合線部分に太く広がり、翅端部分にも現われている。d 雄：通常個体。茶褐色部分はやや発達している。e 雄：茶褐色部分発達個体。f 雄：通常個体。対馬産のものは総じて茶褐色部分が発達する傾向がある。
3. *gibbicollis*; a 雄：体が大きく全体に太くて短い。前胸背も幅広い。b 雌：雄同様に大型、上翅のLp紋がS紋に連絡する傾向がない。
4. *signifera*; a 雌：体は細長く触角が短い。Lp紋がS紋に連絡する傾向が現われている。b 雌：通常個体。c 雌：通常個体。対馬ではLp紋がS紋に連絡しているものが多い。d 雌：Lp紋がS紋に連絡する傾向を現わさない個体。上翅斑紋では前種に酷似する。この個体ではS紋が小楯板付近で広がっている。e 雄：斑紋の発達が弱い個体。Lb、Lm、Lp紋はそれぞれからうじて連絡する。f 雄：通常個体。g 雄：通常個体。Lm、Lp紋は顯著に連絡するが、決してS紋に連絡する傾向を現わさない。

参考文献

- Kraatz, G. (1879) Ueber die Bockkafer Ost-Sibiriens, namenlich die von Christoph am Amur gesammelten. *Dtsch. ent., Z.*, 23 : 78-117.
- Bates, H. W. (1884) Longicorn beetles of Japan. *J. Linn. Soc, London Zool.*, 18 : 205-262.
- 白水隆・松田勝毅・明石照男 (1961) 対馬の天牛類、北九州の昆蟲 8 (1) : 31-43.
- Hayashi, M. (1968-'69) A monographic study of the lepturine genus *Pidonia* Mulsant (1863) with special reference to the ecological distribution and phylogenetical relation (Coleoptera : Cerambycidae). *Bull. Osaka Jonan Womens Junior Coll.*, 3 : 1-61 (1968), 4 : 69-111 (1969).
- 浦田明夫 (1969) 対馬の昆虫、カミキリムシ 昆虫と自然 4 (3) : 16-20.
- 足立一夫 (1972) 対馬北部で採集した天牛類目録 北九州の昆蟲 18 (3) : 49-51.
- 草間慶一 (1973) 日本産カミキリの生態と分布一覧表 pp 158, 新しい昆虫採集案内 (III).
- 足立一夫 (1974) 1973年対馬北部カミキリ紀行 北九州の昆蟲 20 (1) : 17-27.
- 中根猛彦 (1975a) 日本の甲虫 (14) かみきりむし科 9 昆虫と自然 9 (13) : 4-7.
- (1975b) 日本の甲虫 (15) かみきりむし科 10 同誌 10 (1) : 12-15.
- (1975c) 日本の甲虫 (16) かみきりむし科 11 同誌 10 (2) : 5-9.
- 内野 晃 (1977) 大星山(対馬)のカミキリムシ 筑紫の昆虫 17 (1) : 5-10.
- 入江平吉 (1982) 対馬のカミキリムシ 北九州の昆蟲 29 : 111-119.
- Kuboki, M. (1982) Notes on the Lepturinae Genus *Pidonia* Mulsant from Japan and Its Adjacent Regions (Coleoptera, Cerambycidae) *Spec. Iss. Mem. Retir. Emer Prof. M. Chujo*, 113-121.
- 今坂正一 (1985) 対馬産ナガバヒメハナカミキリについて 月刊むし (117) : 16-18.
(1) 〒113 文京区本郷3-39-12 日本野生生物研究センター
(2) 〒270 松戸市常盤平3-30-2-715)

第9回・名古屋支部例会記

井野川 重則

昭和60年3月10日愛知県産業貿易会館において、第9回日本鞘翅目学会名古屋支部大会が開かれた。今回は、地元三重県の昆虫同好会の総会と開催日が重なり三重県からの参加者が無かったため、16名の参加と少規模となってしまった。

講演は以下の2題が行なわれた。

曾田貞滋氏……「オサムシの生活史」

佐藤正孝氏……「ヨーロッパの博物館見て歩き」

大会後、会場近くのすし屋において親睦会が催され、夜遅くまで甲虫の話に花が咲いた。

参加者（順不同 16名）

曾田貞滋 佐藤正孝

穂積俊文 石田勝義

井野川重則 蟹江昇

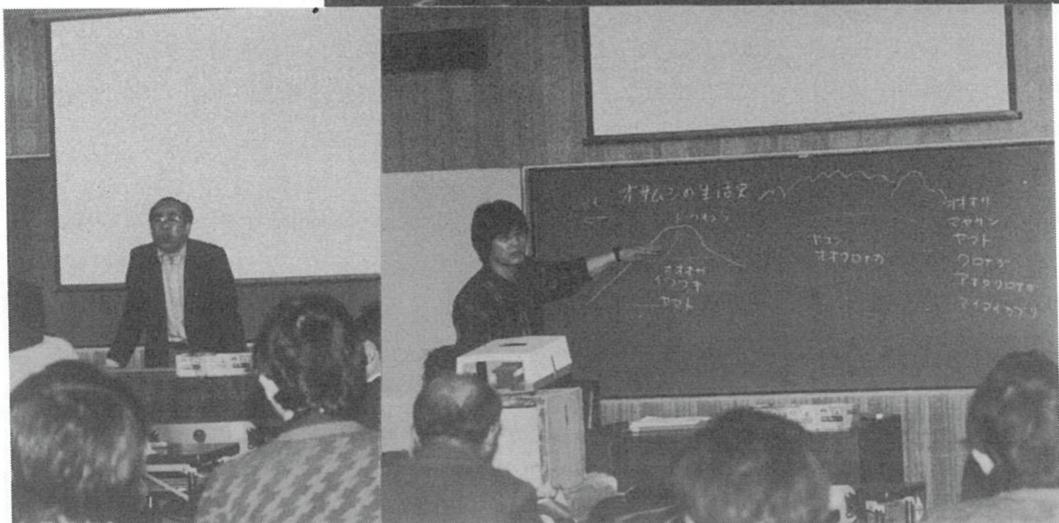
野平照雄 清水信治

佐々治寛之 岩崎博

井上晶之 後藤武司

川瀬英夫 森部一雄

河路掛吾 大塚篤



日本鞘翅目学会第9回総会

斎藤 明子

昭和59年12月2日に東京浜松町の機械振興会館にて第9回の総会が開催された。

すでに例会のレポートおよび参加者は当学会会員の藤田宏氏によって月刊むし1985年1月号に報告されている。

講演は特別講演1題であった。

森本 桂（九州大学農学部昆虫学研究室）

「ゾウムシ類の系統と分類の現状」

森本先生の講演は、初めにゾウムシ類の系統を述べる前に、現在の系統分類学の現状を話された。それは、系統を考える上で、まず今現在系統を論じられる場合マイヤーの学派を支持するのか、ヘニックの学派を支持するのかを明確にする必要があるということであった。このことは、系統を論じる場合も、系統が論じられた論文を読む場合も同様であり、議論している人あるいは著者がどの立場に立っているのかを知らなければならない。先生は、この両学派の内容をかいづまんで紹介して下さった。

次いで、会場内で配布された1984年11月現在の日本産ゾウムシ上科（キクイムシ・ナガキクイムシ両科を除く）のリストに沿ってお話し始めた。

その概要は表に示す通りである。

リストに基づいて各グループ毎に分類学的な問題点や生態等、興味深いお話を伺う事ができた。特に各グループ毎にA～Dのランクで示された、既記載種と実際に生息する種とのギャップには大変驚かされた。

これらの内容のいくつかを上げると以下の通りである。

Apion ホソクチゾウムシ属は全世界に1,400種、52亜属、*Trachyphloenini* オチバゾウムシ族のケシツチゾウ2種は人為的に移入されたものと思われる。*Rhynchaeninae* ノミゾウムシ亜科は保育社の原色日本甲虫図鑑(IV)以降、森本先生によりESAKIA(22):5-76(1984年)において大幅な追加と弱干の種名変更があり、現状では図鑑の検索表が使えないくなっている。この内容は配布されたリスト中には掲載されている。*Baridinae* ヒメゾウムシ亜科に含まれる属の取り扱いには現状では問題がある。*Zygopinae* クモゾウムシ亜科は、分布の中心が東南アジア、*Cryptophyohinae* クチカクシゾウムシは非常に分類の遅れたグループで、さらに約110種ほど増えるだろう。*Cossoninae* キクイゾウムシ亜科は、いずれの種も小型でよく似ており、さらに材と共に広く分散する傾向があるため、分類学的に難しいグループである。日本には50属100種以上が分布しているものと考えられる。

……など、内容が豊富であり、私のメモに抜けも多いと思うが、概要は上記のようなものであった。

Superfamily CURCULIONOIDEA ゾウムシ上科に含まれる亜科別種数
(キクイムシ・ナガキクイムシ両科を除く)

Family	Anthribidae	ヒゲナガゾウムシ科		
Subfamily	Choraginae	ノミヒゲナガゾウムシ亜科	32	B
Subfamily	Anthribinae	ヒゲナガゾウムシ亜科	124	A
Family	Attelabidae	オトシブミ科		
Subfamily	Rhynchitinae	チョッキリゾウムシ亜科	55	B
Subfamily	Attelabinae	オトシブミ亜科 *	29	A
Family	Brentidae	ミツギリゾウムシ科		
Subfamily	Cyladinae	アリモドキゾウムシ亜科	1	A
Subfamily	Brentinae	ミツギリゾウムシ亜科	26	A
Family	Apionidae	ホソクチゾウムシ亜科		
Subfamily	Apioninae	ホソクチゾウムシ亜科	16	D
Subfamily	Nanophyinae	チビゾウムシ亜科	12	A
Family	Curculionidae	ゾウムシ科		
Subfamily	Otiorhynchinae	クチブトゾウムシ亜科	72	C
Subfamily	Brachyderinae		22	
Subfamily	Sitoninae	コフキゾウムシ亜科	8	A
Subfamily	Pachyrhynchinae	カタゾウムシ亜科	2	A
Subfamily	Viticinae	クチブトチビゾウムシ亜科	2	A
Subfamily	Alophinae	ヤマゾウムシ亜科	4	B
Subfamily	Hyperinae	タコゾウムシ亜科	10	A
Subfamily	Galloisiinae	マルクチゾウムシ亜科	1	A
Subfamily	Cleoninae	カツオゾウムシ亜科	19	B
Subfamily	Mecysolobiinae	アシナガゾウムシ亜科	8	B
Subfamily	Trigonocolinae	カタピロゾウムシ亜科	2	A
Subfamily	Apheliniae	ハマベゾウムシ亜科	2	C
Subfamily	Notarinae	イネゾウムシ亜科	14	B
Subfamily	Smicronyctinae	ケシツブゾウムシ亜科	2	B
Subfamily	Bagoinae	カギアシゾウムシ亜科	3	D
Subfamily	Tanysphyrinae	ミズゾウムシ亜科	2	A
Subfamily	Gymnaetrinae	コバンゾウムシ亜科	7	B
Subfamily	Cioninae	タマゾウムシ亜科	7	B
Subfamily	Rhynchaeninae	ノミゾウムシ亜科	45	A
Subfamily	Acalyptinae	デオゾウムシ亜科	2	C
Subfamily	Tychiinae	コガタゾウムシ亜科	20	D
Subfamily	Anoplinae	ツメナシゾウムシ亜科	2	A
Subfamily	Petalochilinae	シロゾウムシ亜科	1	B
Subfamily	Anthromominae	ハナゾウムシ亜科	11	C
Subfamily	Curculioninae	シギゾウムシ亜科	51	A
Subfamily	Baridinae	ヒメゾウムシ亜科	28	D
Subfamily	Phaenomerinae	ツツヒメゾウムシ亜科	1	A
Subfamily	Ceutorhynchinae	サルゾウムシ亜科	56	D
Subfamily	Zygopinae	クモゾウムシ亜科	32	D
Subfamily	Magdalinae	ツツキクイゾウムシ亜科	10	A
Subfamily	Carciliinae	ツツゾウムシ亜科	2	A
Subfamily	Pissodinae	キボシゾウムシ亜科	7	C
Subfamily	Acicnemidinae	カレキゾウムシ亜科	12	D
Subfamily	Hylobiinae	アナアキゾウムシ亜科 **	45	A
Subfamily	Styanacinae	コブコブゾウムシ亜科	3	A
Subfamily	Desmidophorinae	コブゾウムシ亜科	1	A
Subfamily	Cryptorhynchinae	クチカクシゾウムシ亜科	78	D
Subfamily	Cossoninae	キクイゾウムシ亜科	43	D
Family	Rhynchophoridae	オサゾウムシ科		
Subfamily	Dryophthorinae	ホソキクイサビゾウムシ亜科	4	B
Subfamily	Stromboscerinae	キクイサビゾウムシ亜科	6	B
Subfamily	Cryptoderinae	シロオビゾウムシ亜科	2	A
Subfamily	Rhynchophorinae	オサゾウムシ亜科 ***	22	A

(A : 90 % 以上記載されているもの、 B : 70 - 90 %, C : 50 - 70 %, D : 50 % 以下)。

* Sawada, K. & K. Morimoto (1985) J. Fac. Agr., Kyushu Univ., 30(2-3):175-195.
において 1 種追加されている。

** オチバゾウムシ属を除いた場合が A

*** Morimoto, M. (1985) EASAKIA, (23):67-76. において 4 種追加されている。

日本鞘翅目学会・会員動静
(1986年2月2日～1986年6月30日)

◦新入会員

会員番号 氏名 郵便番号 住所 所



◦住所変更（新住所）



◦訂正



《 T T S 取扱い同好会・学会誌ご案内》

「jezoensis」「うすばき」「Coenonympha」「蝦夷白蝶」「GLACIALIS」「青森の蝶」「Celastrina」「Tsu-garu-Konchu」「秋田自然史研究」「東北昆虫」「東北の自然」「みやぎインセクト」「インセクト」「おけら」「おとしふみ(筑波)」「寄せ蛾記」「翅膀」「おとしふみ(所沢)」「オサムシマップ」「茫茫」「羽化」「LEPTALINA」「カミキリニュース」「多摩虫」「うすばしろ」「Love Beer」「INSECT TIMES」「早稻田生物」「日本セミの会々報」「甲虫ニュース」「ELYTRA」「さやばね」「蛾類通信」「ミツバチ科学」「Memorirs of the Tsukada Collection」「家屋害虫」「ROSTRIA」「インセクタリウム」「三多摩虫界速報」「TSU I SO」「清澄」「神奈川虫報」「Kanagawa-Chuo Supplement」「花蝶風月」「コレオブテリスド」「越佐昆虫同好会会報」「越佐昆虫同好会特別報告」「誘蛾燈」「山梨の昆虫」「まつむし」「待虫通信」「長野蛾報」「New Entomologists」「北信自然研究(北信生物)」「ギフチョウ研究」「NORNA」「TOKURANA」「TOKURANA Special」「駿河の昆虫」「静岡の甲虫」「遠州の自然」「三河の昆虫」「こめつきむし」「佳香蝶」「Bull. Japan Entm. Academy」「だんだらちょう」「とびむし」「啓蟬」「AMICA」「AMICA通信」「とっくりぱち」「石川むしの会特別報告」「ひらくら」「杉峠」「蝶道」「AKITSU」「MICROCOSM」「insect 丹後・若狭」「丹後・若狭の昆虫」「AESCHNA」「びいとるず」「NOCTILUCA」「SAKAIENSIS」「昆虫の世界」「MDK News」「蝶と蛾」「やどりが」「IWASE」「昆虫學評論」「ねじればね」「まくなぎ」「KINOKUNI」「きべりはむし」「Crude」「IRATSUME」「てんとうむし」「ひろおび」「PARNASSIUS」「すずむし」「ゆらぎあ」「すかしば」「広島虫の会会報」「備後の蝶」「下関昆虫同好会誌」「四国昆虫学会会報」「愛媛の昆虫」「いよにす」「げんせい」「むし」「PULEX」「VITAE」「わたくしたちの自然史」「北九州市自然史博物館研究報告」「KORASANA」「ちょうどう」「蝶」「Acta Hymenopterologica」「Panmixia」「昆虫分類学若手懇談会ニュース」「佐賀の昆虫」「二豊のむし」「こがねむし」「タテハモドキ」「九州虫の会会誌」「九州虫の会だより」「熊本昆虫同好会会報」「SATSUMA」「アルボ」「Fragmenta Coleopterologica」「Fragmenta Coleopterologica Japonica」「LEBEN」「あかぼし」「琉球の昆虫」「フタオ」「亜熱帯林」

上記が小社取扱の主な同好会・学会誌で、最新号はもとよりバックナンバーも極力揃えております。各誌各号の内容については小社在庫リストにて入荷の都度、短報を含めた全タイトルをご案内していますので、下記の要領でご請求下さい。

日本鞘翅目学会出版物

『ELYTRA』『さやばね』バックナンバー（発行年度毎のセット販売）△印はコピー復刻版。

『ELYTRA』1(1),△2(1),(2) 3冊組	¥ 1,800(元250)。
『ELYTRA』3(1/2)『さやばね』△(1) 2冊組	¥ 1,600(元250)。
『ELYTRA』4(1),(2)『さやばね』△(2) 3冊組	¥ 1,800(元250)。
『ELYTRA』5(1),(2)『さやばね』(3) 3冊組	¥ 3,000(元250)。
『ELYTRA』6(1),(2)『さやばね』(4) 3冊組	¥ 3,000(元250)。
『ELYTRA』7(1),(2)『さやばね』(5) 3冊組	¥ 3,000(元250)。
『ELYTRA』8(1),(2)『さやばね』(6) 3冊組	¥ 3,000(元250)。
『ELYTRA』9(1),(2)『さやばね』(7) 3冊組	¥ 3,000(元250)。
『ELYTRA』10(1),(2)『さやばね』(8) 3冊組	¥ 3,000(元250)。
『ELYTRA』11(1/2)『さやばね』(9) 2冊組	¥ 3,000(元250)。
『ELYTRA』12(1),(2)『さやばね』(10) 3冊組	¥ 3,000(元250)。

『日本鞘翅目学会特別報告』No.1 (1984): Check-list of Formosan Tenebrionidae. ¥ 1,000(元200)。

この出版物は会員でも有料配布です。但し出版年度の会員は割引券により会員割引あります。

ご注文はハガキに署名捺印の上(18才未満は保護者印)、お送り下さい。直ちにお送り致します。
代金は到着後7日にご送金下さい。送料は2冊以上になると安くなります。

お近くの方は直接小社へ(小田急・国鉄南武線 登戸駅7~8分)

—駅前の案内図と電柱広告でご案内しています—

定休: 水曜・祝日。 平日 9時半~19時; 日曜 13~17時。

JCB・VISA カード加盟店 常時4,000タイトル以上在庫。

在庫リスト送料 既発行分10冊 ¥250; 年間送料 ¥700-切手-

T T S 昆虫図書

214 川崎市多摩区登戸新町14

TEL 044-911-8511(代); 911-5961

郵便振替 東京 0-73156

収 入	支 出
前期繰越	¥349,773.-
入会金	¥5,500.-
バックナンバー代	¥75,600.-
1982年度分会費	¥33,000.-
1983年度分会費	¥154,000.-
1984年度分会費	¥572,000.-
1985年度分会費	¥261,000.-
1986年度分会費	¥6,000.-
広告費	¥90,000.-
寄付	¥1,000.-
別刷代	¥101,250.-
総会会場費	¥34,000.-
カミキリ大図鑑印税(第一回分)	¥900,000.-
	ELYTRA、Vol.10 No.2 印刷代(残金)
	さやばね No.9 印刷代
	ELYTRA、さやばね 総目次代
	ELYTRA、Vol.11 No.1-2、Vol.12 No.1 印刷代
	さやばね No.10 印刷代
	総会会場費(1983年度分)
	総会会場費、準備費(1983年度分)
	カミキリ大図鑑経費
	会誌発送費
	事務関係費
	雑費
	次期繰越
	¥237,500.-
	¥166,000.-
	¥100,000.-
	¥1,033,000.-
	¥162,500.-
	¥43,250.-
	¥102,500.-
	¥217,000.-
	¥179,220.-
	¥30,300.-
	¥4,630.-
	¥307,223.-
¥2,583,123.-	¥2,583,123.-

※1984年末から1985年はじめにかけて「日本産カミキリ大図鑑」(講談社)の印税3,078,000円が振り込まれましたが、この半額に当たる分から諸経費を差し引いた差額1,295,800円が、著者グループの方々より本会に寄付されました。今後の会運営に有意義に使わせていただきたいと思いますが、会員を代表して、著者グループの方々のご厚志に心から感謝したいと思います。また、長い間の執筆、本当にご苦労様でした……。

(事務局)

さやばね No.11 昭和61年11月10日発行

編集者：齊藤秀生 齊藤明子

発行所：日本鞘翅目学会(〒110 東京都台東区東上野4-26-8、福田惣一郎)

株式会社

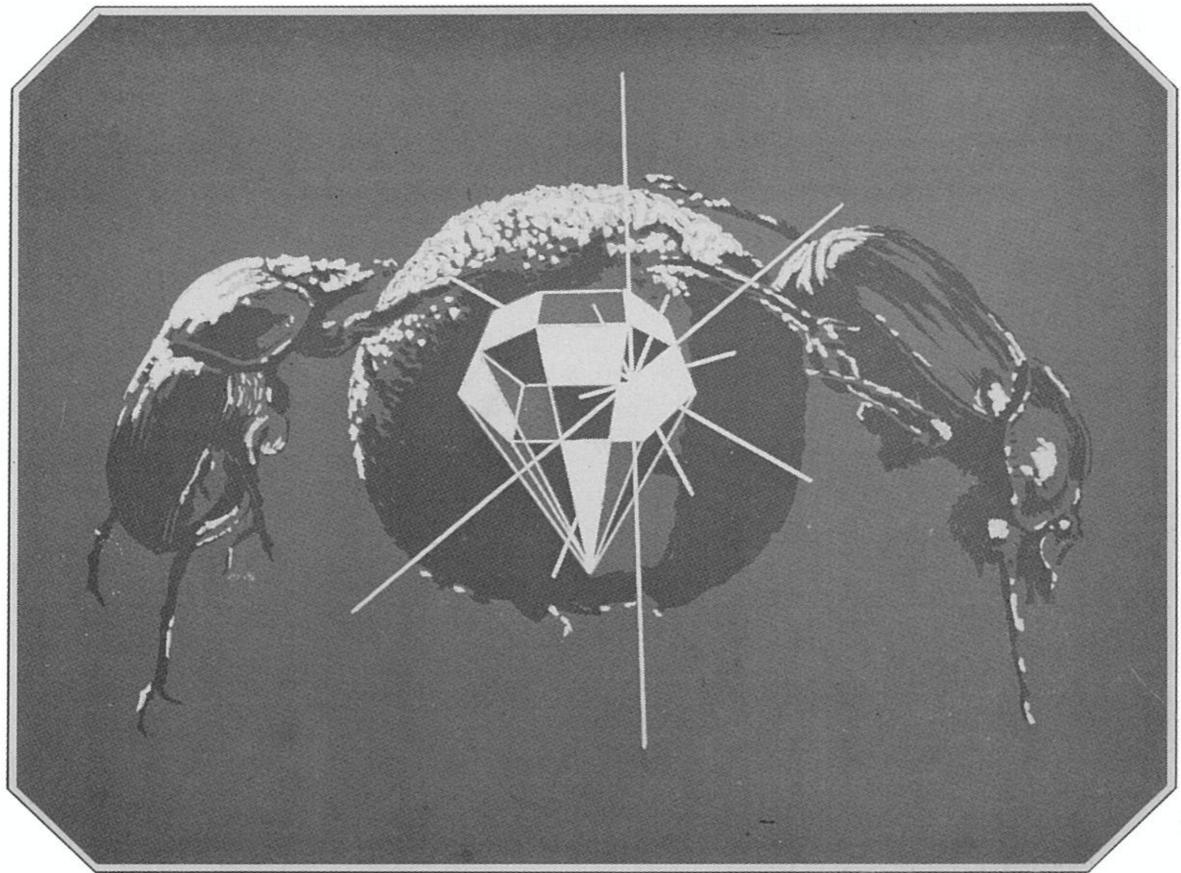
志賀昆虫普及社

〒110 東京都渋谷区渋谷1丁目7番6号(宮益坂上)
TEL. 03 (409) 6401 (代) 振替/東京21129



- 新製品 / 最上質ステンレス製シガ有頭昆虫針
0.1.2.3.4.5号発売中
- 専門用カタログあり 要郵券 140円
- 営業種目 採集瓶・採集箱・幼虫胴乱・採集バンド・展翅板類・
飼育用具・顕微鏡・標本箱各種・三角ケース・捕虫網・標本瓶・植
物採集用具・殺虫管・プレパラート製作用具・名箋・ピンセット・
平均台・液浸用管瓶・ルーペ類・コルク類・その他

営業時間: 9時~18時
休日: 毎日曜、祝祭日、10月1日



真珠より美しく ダイヤより価値がある 大切な標本を永久に守る 『ドイツ型標本箱』

自然はますます大切なものとなつてきました。
この不思議な世界を解明する貴重な手掛りとなる昆虫標本は、価値あるものとして永久に保存したいものです。

そんな願いをこめて、タツミ製作所では、昆虫標本の保存に最適なドイツ型標本箱をお届けします。

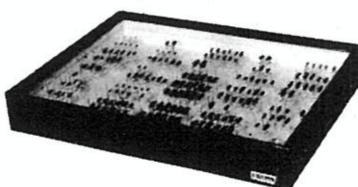
*すばらしい特長

- くるいのこない良質な木材を使用
- 湿気や乾燥にも強い独特の構造
- パラゾールにも変化せず、標本がより美しく見える白色プラスチック底
- 高級ニス塗装の丈夫で美しい仕上げ

※標本箱のほか、展翅板など昆虫標本作成に必要な器材もあります。
昆虫器材カタログ、昆虫関係輸入図書・委託図書リストもあります。

郵便振替 東京一一三四七九 一〇三(八一)四五四七
五二三二二二一五

(有)タツミ製作所



大型
4,500円(送料別)

中型
4,000円(送料別)

この価格は昭和51年4月現在のものです